
仮面ライダーSPIRITS NEO

セイバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーSPIRITS NEO

【Nコード】

N8429J

【作者名】

セイバー

【あらすじ】

この物語は、ネギまやガンダム00などのキャラクターが平成仮面ライダーに変身して、悪と戦う物語である

プロローグ

仮面ライダーそれはただの物語ではない。

彼等の魂を受け継いだ十の世界の戦士達が悪の組織力オスシヨツカ
ーの野望を打ち砕く

麻帆良学園

ここでは3 - A組のメンバーは天体観測をしていたのである。
？

「うわぁー、日本の星空ってすごくキレイなんですネ。明日菜さん」
明日菜

「ナギったら、ホントお子ちゃまなんだから」
イギリスとは違った星空にネギと呼ばれた少年は興奮していた。そ
の隣にいる明日菜もネギを笑顔で見ていた。
？

「ネギくん」
ネギ

「どうしましたか、木乃香さん」
木乃香

「あの星なーんかうち達の方に向かったらんか？しかも二つ」
木乃香の言うとおり二つの流星とゆうより光がネギと明日菜に向か
ってきた。そしてその光は、二人に当たった。
そして、

木乃香
「あ、せつちゃん、二人とも目覚ましたで」

ネギ
「あれ、ここは」
刹那

「二人はあの光を浴びて気絶していたんです」

？

「ネギ先生、無事でよかったですわ！先生の身に何かあったら、この雪広あやか夜も眠れませんでしたわ」

？

「おおげさだよ、いいんちょ」

あやか

「何行ってるんですのまき絵さん！これだからあなたはダメなんです！」

まき絵

「え、あたしだめなの？」

あやか

「ええ、ダメです！あなたは佐々木まき絵失格です！！」

まき絵

「ガーン」

まき絵はショックを受けていた。

？

「亜子、アキラ、美空、ネギ君無事でよかったね」

亜子

「明日菜も傷一つないで。裕名」

アキラ& a m p・美空

「よかったー」

？

「二人とも、無事ですか？和美さん」

和美

「そつだよ、さよちゃん」

？

「ちづ姉、でもなんで、あの光は二人に向かっていったのかな？」

千鶴

「夏美、人はいつでも輝いていたいものよ」

夏美

「全然わかんないよ」

？

「オイ、葉加瀬、なんなんだ、あの光は」

葉加瀬

「さあ、まだ解析データが出ません。ちうちうさん」

千雨

「ちうちうじゃねえ、千雨だー」

？

「いったいなんネ、アレは、この超様でも分からないなんて。あ、五月二人に肉まんを作って欲しいネ」

五月

「はい。あ、あと古菲さん、円さん、美砂さん、桜子さん、風花さん、史伽さん、ザジさん、真名さんもどうですか」

古菲

「おう、食べるアル！」

円&美砂&桜子&風花&史伽

「食べるー」

ザジ

「肉まんは憎まん」

真名

「5点」

？

「ネギせんせー無事ですか？」

ネギ

「あ、のどかさん、夕映さん、ハルナさん、楓さん」

楓

「どうやら、大丈夫でござるな。エヴァ殿」

エヴァ

「まったく、心配して損したぞ」

？

「ですが、マスターは聞いたときには、すごく心配していました」
エヴァ

「だまれ、茶々丸!!」

ハルナ

「まあまあ」

夕映

「しかし、なんだか、不吉なことが起こりそうです」
ハルナ

「気のせいでしょ。どうせ」

しかし、この時気ネギ達は付いてなかった。これがある意味現実の物になるということを。

ちなみに、まき絵はまだ失格状態になっていた（笑）

第1話 ブレイドダブルオー オレがガンダムだ（前書き）

O P : R o u n d Z E R O } B L A D E B R A V E

第1話 ブレイドダブルオー オレがガンダムだ

？

「お呼びでしょうか」

？

「ああ、この世界にはライダーフォースを浴びた人間が多く存在する」

？

「そこへオレ達に行って欲しいわけですね」

？

「そつだ。お前の生まれ故郷でもあるこの世界にだ」

？

「「ラジャー」」

そういうと二人は、マシンの中に入った。そして、モニターには、扇状に広がったトランプと白い巨大ロボットが映っていた。

四年前

？

「死んじゃえばいいよ」

赤いロボットに乗った少女は任務のイライラを晴らすためにたまたま見かけた結婚式場にビームを打ち込もうとした。しかし、

？

「やめるんだ」

？

「えっ？」

少女は振り向くが、周りには誰もいない。いったいどうしたのかとおもったら、

？

「罪のない人の命を奪ってはいけない」

？

「だ、誰よ！？」

？

「私はヒューマンアンドット。君達人間の祖先だ」

？

「アन्दット？なにそれ？」

ヒューマンアन्दット

「君も知っているはずだ、命の尊さを。命とは、一つしかない。それは理不尽に奪っていいものではない」

？

「.....」

？

「ネーナー！」

ネーナ

「ヨハ兄！ミハ兄！」

ミハエル

「大丈夫か？さっきから返事もしなかったから心配したぞ」

ヨハン

「とにかく、今回のミッションは、休んでいる。いいな」

ネーナ

「う、うん」

ネーナと呼ばれた少女は兄の命令を受け、基地に帰っていった。そして、彼女にもネギと明日菜も浴びたライダーフォースが近づき当った。そして四年後

ある滝の前、一人座禅を組んでいる若者に一人の赤髪の女性が近づいていった。

？

「アンタかい、ミスターブシドーて言うのは」
ミスターブシドー

「何者だ？」

？

「あたしは、フォルテ。早速だけども、アンタに仮面ライダーになつて欲しいんだよ」

ミスターブシドー

「なんだそれは」

すると、二人の目の前に、二体の怪物が近づいてきた。カブトムシの怪物ビートルアンデットとクモの怪物スパイダーアンデットだ。フォルテ

「ちっ、カテゴリーエースが二体も！」

ミスターブシドー

「ムッ、なんだこいつは」

ブシドーの足元に、サソリ型のメカサソードゼクターが近づいていた。

フォルテ

「このサソードヤイバーにソイツをつけな！」

そついうと、サソードヤイバーをブシドーに投げつける。ブシドーはそれを受け取った。そして

ミスターブシドー

「変身」

『HENSIN』

電子音がなると、彼の体は、タキオン粒子に包まれ、紫のサソリをモチーフにした仮面ライダーサソードに変身した。

サソード

「ミスターブシドー改め、仮面ライダーサソード参る！」

サソードは二体のアンデットに切りかかった。しかし、アンデットも負けじと向かって来る。ビートルアンデットは剣をふりかざし、スパイダーアンデットは爪で襲い掛かった。それをサソードヤイバーで受け流していくサソード。だが、スパイダーアンデットは糸を吐き出し、サソードの動きを止めた。

フォルテ

「キャストオフするんだ!!」

サソード

「キャストオフ!」

『CAST OFF』

『CHANGE SCORPION』

サソードはマスクドフォームからライダーフォームになった。それによりサソードの身を包んだ糸も全て千切れた。

サソード

「行くぞ!!クロックアップ!!」

『CLOCK UP』

そしてサソードは、超高速の世界に入った。これにはアンデットも対処できずにいた。

サソード

「切り捨て御免!!ライダーズラッシュ!!」

『RIDER SLASH』

サソードはサソードヤイバーによる斬撃でアンデットを切って行った。そして、アンデットは吹っ飛ばされて爆発した。しかし、アンデットはベルトが割れている飢えに気絶しているだけである。

サソード

「クッ、何故だ」

フォルテ

「アンデットは封印しないと活動を抑えられないんだよ」

そういうとフォルテは、サソードにカードを二枚渡した。そしてサソードは、そのカードをアンデットに投げつけた。すると、アンデットはカードに吸い込まれていき、サソードの元に戻ってきた。

フォルテ

「おっし、これで、カテゴリーエースの封印は終わった。しかも、クラブのカテゴリーエースも完全封印だよ」

そして、変身をといたブシドーはフォルテに話しかけた。

ミスターブシドー

「フォルテよ」

フォルテ

「なんだい」

ミスターブシドー

「私のほかにもライダーはいるのか？」

フォルテ

「ああ、いるよ。ちなみに、あたしも仮面ライダーさ」

ミスターブシドー

「そうか。それで私はどうすればいい？」

フォルテ

「とりあえず、基地に案内するよ。あたしはほかのライダーを探すからさ」

そして、フォルテは、ブシドーを基地に案内し、ほかのライダーを探しに行った。

連邦軍基地

？

「始めまして、私は連邦軍で大佐をやっているカティ・マネキンと申します」

フォルテ

「どーも、早速なんだけどさ、アンタの部下ライダーの素質あるからさ、これ使ってくんない？」

そっとうとフォルテは、緑のカードデッキを置いた。

カティ

「しかし、その話は本当ですか？世界が滅ぶというのはフォルテ

「ああ、本当「大佐————！！」な、なんだ！」

？

「大半です。この基地もオレたち以外全員殺されました」カティ

「何、ついにここもか」

すると、窓からトカゲ型のアンデットリザードアンデットが、現れた。

フォルテ

「チッ、オイアンタ、それ使って変身しな」

？

「へっ？なんだか知らねえが、オレの大佐に手を出すな！テメーはこのオレ、不死身のコーラサワー様が相手になってやるぜ！」

すると、コーラサワーの腰にVバックルが出現した。

コーラサワー

「変身」

コーラサワーが先ほどのカードデッキをVバックルに差し込むと彼は仮面ライダーゾルダに変身した。

ゾルダ

「すげえ、これならいけるぜ！！見ててください！大佐！」

ゾルダはマグナバイザーでリザードアンデットを撃ち抜いた。

フォルテ

「腰のカードデッキからカードをバイザーに装填するんだ」

ゾルダはカードを引き、マガジンスロット部にカードを装填した。

『SHOOT VENT』

すると、上からギガキャノンが落ちてきて、ゾルダの型に乗った。

ゾルダ

「喰らえー」

ゾルダはギガキャノンをリザードアンデットを発射し、吹っ飛ばした。

ゾルダ

「あれ？なんで死なねーんだ？」

フォルテ

「あいつ達は封印しなきゃいけないんだよ」

そういうとサソードと同じようにカードを渡しアンツデットに投げつけた。そしてカードに吸い込まれ、封印された。

フォルテ

「さてと、お次は・・・」

フォルテは二人を基地に連れて行きまたライダーを探しに行った。

街中

？

「いくよ、ルイス」

ルイス

「うん、沙慈」

ルイスと沙慈と呼ばれた二人の男女はシカのアンデットディアアンデットとイナゴのアンデットローカストアンデットと戦おうとしていた。

沙慈&ルイス

「「変身」」

「OPEN UP」

二人の前にオリハルコンゲートが現れ、それぞれ、ラルクと、ランスに変身させた。二体のアンデットは格闘戦で二人を迎え撃つも、格闘戦やラルクラウザー、ランスラウザーを使い、アンデットを追い詰めていった。

「MIGHTY」

二人はそれぞれ、ラウザーにカードをラウズしていき、ランスはディアアンデットにインパクトスタップを、ラルクは、ローカストアンデットにレイバレットを放った。そして二体のアンデットを二人は封印し、変身を解いた。

フォルテ

「どうやら、そっちは片付いたようだね」

沙慈

「フォルテさん」

ルイス

「ほかにライダーはいましたか？」

フォルテ

「ああ、いたよ。しかも二人。ただ・・・」

沙慈

「ただ？」

フォルテ

「まだあいつがねえ・・・」

沙慈

「あいつ？」

回想

ネーナ

「えっ、アタシにライダーになれって？」

フォルテ

「ああ、今この世界も危機に達している」

フォルテはネーナも仲間にしようとしていた。しかし、

ネーナ

「できるわけじゃない！アタシは兄タズを失ったうえに、生きる意味もなくなったのよ！そんなアタシが戦えるわけじゃない！！」

そういうとネーナは、フォルテの元から去っていった。

沙慈

「そうですか」

フォルテ

「けどまあ、あたしもこのまま引き下がるわけには、いかないしね。さて、最後は」

トレミー？

？

「おい、刹那。これは、いつたい」
刹那

「ああ、これはただなことではない」

？

「まさかトレミーがこんなことになっているなんて」

そう彼等ソレスタルビーイングの基地トレミーは何者かの襲撃を受け半壊されていた。

？

「アレルヤ・・・」

アレルヤ

「大丈夫だよ、マリィ」

すると、

？

「ライル・・・」

ライル

「アニニュー？（いや、そんなバカな）」

かつて死んでいった仲間、アニニュー・リターナーを思い浮かべているライル。そして、

フォルテ

「アンタ達だね、ソレスタルビーイングってのは」

刹那

「何者だ」

フォルテ

「あたしは敵じゃない。むしろ味方さ。それよりアンタ達ライダーに「アニニュー！！」何っ！」

ライルの声がした方向を振り向くと、死んだはずのアニニューがいた。

アニニュー

「ライル、うつ・・・うあああ！！！」

アニニューの体がトラのアンデットタイガーアンデットに変わっている

った。

アレルヤ

「こ、これはいい」

フォルテ

「チッ、いきなり上級アンデットかい！おいアンタ達！こいつ使って変身しな！」

フォルテは刹那にブレイバツクル、ライルにギャレンバツクル、アレルヤにレンゲルバツクルを投げ渡す。

ライル

「変身！！」

『TURN UP』

ライルの体をオリハルコンゲートが通過し、仮面ライダーギャレンに変身させた。

ギャレン

「アニューー！」

ギャレンはタイガーアンデットに向かって走り出した。刹那とアレルヤもそれに続こうとしたら、突如オーロラがせまって、二人の人影が現れた。

？

「「変身」」

『HENSIN』

『CHANGE KICK HOPPER』

『CHANGE PUNCH HOPPER』

二人はそれぞれ、パンチホッパーとキックホッパーに変身した。

フォルテ

「あれは、仮面ライダーパンチホッパーとキックホッパー！？なぜここに？」

パンチホッパー

「兄貴、あいつ等にも見せようぜ。地獄ってやつをさ」
キックホッパー

「ああ、そうだな」

そして、

ギャレンは、タイガーアンデットと戦っていた。お互い接近戦で戦ってきたが、爪のパワーがあつてか、ギャレンは遠距離から攻撃を仕掛けた。

アニュー

「ラ、ライル」

ギャレン

「アニューか？アニューなんだな！？」

アニュー

「ライルお願い、私ごとこのアンデットを封印して」

ギャレン

「何っ！？」

アニュー

「お願い、私の力じゃ、こいつを抑えることはもう出来ない。だから、お願い」

アニューは自分ごとタイガーアンデットを封印するように頼んだ。その言葉にギャレンは、

ギャレン

「アニュー……。ああ、任せておけ」

そしてギャレンは、カードを二枚ラウズした。

『DROP』

『FIRE』

『BRN IN G S M A S H』

ギャレン

「狙い打つぜー！」

ギャレンは、コンボ技バーニングスマッシュでタイガーアンデットに大ダメージを負わせた。そして、ギャレンはカードを投げつけ、封印した。

アニュー

「ライル」

ライル

「アニュー」

アニュー

「やっぱり、私達分かり合えたよね。どんな姿に生まれ変わっても」

ライル

「ああ」

ギャレンは変身を解き、ライルに戻り、カードを拾った。そして、カードの隣に一人の人影が見えた。その人影は・・・

ライル

「アニュー。どうして？」

アニュー

「ライル・・・。私にも分からない。けどこれでまたあなたに会える・

・・・」

ライル

「アニュー・・・」

ライルはアニューを抱きしめた。もう二度と、この二人が離れ離れにならないことを祈り・・・。

アレルヤ

「地獄だと!？」

刹那

「おまえたちが誰であろうと、倒すまでだ」

刹那& amp; アレルヤ

「「変身」」

『TURN UP』

『OPEN UP』

二人の体をライルや沙慈達のようにオリハルコンゲートが包み込み、

仮面ライダーブレイドとレンゲルに変身していった。

キックホッパー

「クッ、何者だ!?!」

ブレイド

「仮面ライダーブレイド。オレがガンダムだ」

ED: DAYBREAK · S BELL (ガンダム00OP)

第1話 ブレイドダブルオー オレがガンダムだ（後書き）

さてついにブレイド編に突入しました。

この作品のネーナはルイスの親族は殺していません。

よって、殺される心配ありません（救）

あと、このネーナはある人に恋をします。誰だかわかりますか？

第2話 ブレイドダブルオー ネーナの決意（前書き）

O P : R o u n d Z E R O } B L A D E B R A V E

第2話 ブレイドダブルオー ネーナの決意

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは、

フォルテ

「あたしは、フォルテ。早速だけどさ、アンタに仮面ライダーになつて欲しいんだよ」

ミスターブシドー

「私のほかにもライダーはいるのか？」

コーラサワー

「テメーはこのオレ、不死身のコーラサワー様が相手になってやるぜ！」

ネーナ

「アタシは兄々ズを失ったうえに、生きる意味もなくなったのよ！アニュー

「やっぱり、私達分かり合えたよね。どんな姿に生まれ変わっても」
ライル

「ああ」

キックホッパー

「クッ、何者だ！？」

ブレイド

「仮面ライダーブレイド。オレがガンダムだ」

キックホッパー

「ブレイドだと。面白い」

パンチホッパー

「まず最初の地獄の通過者は、お前等だな」

ブレイドとレンゲル、そして二体のホッパーは、それぞれの相手に向かっていった。お互いこぶしを出して、戦っていったが、ブレイ

ドはそれに加え、ブレイラウザーでキックホッパーの体を切りつけ、
レンゲルは、レンゲルラウザーで、パンチホッパーをなぎ払った。
キックホッパー

「なかなかやるな。だが！」

パンチホッパー

「オレ達には勝てねえ!!」

キックホッパー & a m p ; パンチホッパー

「クロックアップ!!」

『CLOCK UP』

ブレイド & a m p ; レンゲル

「何!？」

超高速の世界に入ったホッパー達の攻撃になすすべもなく、防戦一
方になっていた。

マリィ

「アレルヤ!!」

フォルテ

「あたし達も行くよ」

と二人の援護に向かおうとしたとき、突如先ほど同じオーロラが
現れ、ダークローチが現れた。

フォルテ

「ダークローチ!こんなときに!マリィ!!」

フォルテはマリィ目掛けて、白いカードデッキを投げた。そしてフ
ォルテは、ドレイクグリップを持ち、どこからか、現れた、トレイ
クゼクターをセットした。

マリィ & a m p ; フォルテ

「変身!!」

『HENSIN』

フォルテは仮面ライダードレイクに変身し、マリィは白いライダー
ファムに変身した。ファムは剣型の召喚機ランバイザーを使い、
ダークローチを切り裂いていき、ドレイクは、ドレイクゼクターで

撃ち抜いていった。

ドレイク

「これじゃ、きりが無いよ！キャストオフ！」

『CAST OFF』

『CHANGE DRAGONFLY』

ドレイクはゼクターの羽を折りたたみ、ライダーフォームに変身していった。

ドレイク

「クロックアップ！」

『CLOCK UP』

ドレイクもホッパーコンビのように超高速の世界に入った。そして同じ頃、ファムも一枚のカードをバイザーに入れた。

『FINAL VENT』

すると、どこからか、彼女の契約モンスターブランウイングが近づき、ダークローチを吹き飛ばした。

そして、ファムは必殺技、ミスティースラッシュでダークローチを切り刻んでいく。しかし、まだダークローチは残っていた。ローチは逃げようとしたが、

ドレイク

「逃がさないよ。ライダーシューティング」

『RIDER SHOOTING』

残ったローチもドレイクのライダーシューティングで倒された。一方、ブレイドとレンゲルは、クロックアップを使うライダーに苦戦していた。

ブレイド

「アレルヤ、いいか、よく聞け。奴等が一斉に攻撃を仕掛けたときがチャンスだ。そのときにオレ達も必殺技で決める」

レンゲル

「ああ。わかった」

パンチハッパー

「何ゴチャゴチャ話してんだあ？」

キックホッパー

「とどめだ」

パンチホッパー

「ライダーパンチ」

キックホッパー

「ライダーキック」

『RIDER PUNCH』

『RIDER KICK』

二人は必殺技の体制に入った。それにより、クロックアップも解除された。

ブレイド

「今だ！」

『KICK』

『THUNDER』

『LIGHTNING BLAST』

レンゲル

「もらった!!」

『BITE』

『BLIZZARD』

『BLIZZARD CLASH』

二人はそれぞれ、ライトニングブラストと、ブリザードクラッシュを放ち、必殺技を相殺させた。

ライル

「刹那！」

マリ

「アレルヤ！」

その直後、二人の変身は解け、刹那とアレルヤの姿に戻っていった。キックホッパー

「ソレスタルビーイングよ。貴様等の仲間が預かった。返して欲し

くば、この場所まで来い」

そういうと、キックホッパーは地図を放り投げた。

マリー

「アレルヤ！」

フォルテ

「傷が深い！ひとまず、基地まで運ぼう」

アニュー

「ええ」

そしてフォルテ達は、二人を抱え、基地まで戻っていった。そして、この戦いを草むらの中から見ていた人物がいた。

ネーナ

「な、何がどうなっているのよ。なんで、刹那たちがライダーになっ
ているのよ」よし、あとはあいつ等を始末するだけだな。兄貴」
えっ？」

ネーナはパンチホッパーの声に驚く。自分の兄と同じ声だからだ。
そして、ホッパー二体は変身を解いた。

ネーナ

「うそ、ヨハ兄、ミハ兄！？」

かつて、四年前にサーシエスに殺された兄二人が、仮面ライダーと
なって刹那たちに襲い掛かってきたのである。

ミハエル

「チッ、あのオッサンよくこき使ってくれるよな」

ヨハン

「がまんしろ。我々の野望のためにあの男の力が必要だからな」

ミハエル

「ヘイヘイ」

そういうとミハエルとヨハンはトレミー？から去っていった。

ネーナ

「どういうことなの？にいにいずが生きていたなんて」

ネーナは二人の後をつけていった。

基地

刹那

「ここは？」

沙慈

「刹那！気がついたんだね」

ルイス

「良かった」

刹那が声の主を探ると、かつて非ソレスタルビーイングのメンバーであるものの、共にイノベーターの野望を食い止めた仲間、沙慈とルイスの姿がいた。

ミスターブシドー

「久しぶりだな。少年」

フォルテ

「心配すんな。こいつらもライダーさ」

刹那

「何！？」

コーラサワー

「ああ、その通りさ！オレもライダーなんだぜ」

カティ

「ここは、かつて連邦軍の基地だったところだ。まあ、私達も連邦が壊滅してしまって、いる意味はもうないがな」

アニュー

「行きましょう。みんなを助けるために」

ライル

「アニュー。しかし」

フォルテ

「大丈夫さ。さっきそいつにライアのカードデッキを渡しといたから。とりあえず、いくか」

刹那

「ああ」

こうして刹那達は、旧連邦軍基地に向かっていった。

旧連邦軍基地

アレルヤ

「ここか。みんなが捕まっている場所は」

コーラサワー

「早速、お出迎えが来たみたいだぜ！」

コーラサワーが見ると先ほど以上のダークローチが迫ってきた。

ミスターブシドー

「少年よ。ここは我等に任せろ！」

フォルテ

「早く仲間を助けな！」

ミスターブシドー&フォルテ&コーラサワー&mp;アニユー

「……変身……」

『HENSIN』

サード、ドレイク、ゾルダに加え、アニユーが変身したエイ型のライダーライアが刹那達を基地に入れるため時間を稼いだ。

『SWING VENT』

『SHOOT VENT』

自分の契約モンスター、エビルダイバーの尻尾もかたどったムチエビルウィップを振りかざし、攻撃するライア。サソードヤイバーでローチを切り刻んでいくサソード。ギガランチャーやドレイクゼクターで相手を遠くから打ち抜くゾルダとドレイク。しかし一向に数は減らない。

ゾルダ

「どんだけいんだよ。こいつら「離れて」へっ?」

『COPY VENT』

ライアの手にはゾルダが所有しているギガランチャーがある。

ゾルダ

「ちよつと待て、なんでお前がオレの武器持つてんだ!？」
ドレイク

「あのカードは武器をコピーできるからね」

ゾルダとドレイクに混じってライアも砲撃に参加する。

刹那たちはついにホッパーと出合った。

キックホッパー

「ここでお前達を消す」

パンチホッパー

「それに今回は特別ゲストまでいるからなあ」

ライル

「ゲストだと？」

？

「その通り!!」

すると上から金色のスーツを着た男性が現れた。

刹那

「貴様は、アレハンドロ・コーナー！なぜ貴様がここに!？」

かつて四年前自分自身が倒した男。彼はそれを思い出していた。

アレハンドロ

「そのとおり。確かに私は君達に倒された。しかし、あのお方の力
によって助けられたのだ。」

ライル

「あのお方だと？」

アレルヤ

「何者なんだ？」

アレハンドロ

「知る必要は無い。なぜなら、君達は私に倒されるのだからな！」
そういうとアレハンドロは、カニの絵が描かれたカードデッキを手
に持ち、

アレハンドロ

「変身」

彼もVバックルにデッキを差込み力二をモチーフにした仮面ライダー、シザースに変身した。

シザース

「この私が、君達を新世界の手向けにしよう」

そういうと刹那達の周りには、ダークローチが現れた。

沙慈

「刹那！」

マリ

「ここは私達が！」

沙慈&ルイス&マリ

「変身」

『OPEN UP』

ランス、ラルク、ファムはダークローチの大群に迫っていった。

刹那&ライル&アレルヤ

「変身」

『TURN UP』

『TURN UP』

『OPEN UP』

三人は変身した。

シザース

「ふん」

『STRIKE VENT』

シザースの右腕にハサミ型の武器シザースピンチが装着された。それを振り回すシザース。しかしブレイドは、ブレイラウザーでそれをなぎ払う。一方、ギャレンとレンゲルはホッパー達に苦戦していた。

ギャレン

「クッ、さすがに接近戦じゃ分が悪いぜ」

パンチホッパー

「そらそら、どうした？」

キックホッパー

「この程度か？」

レンゲル

「クッ」

？

「おい、アレルヤ」

レンゲル

「ハレルヤ？」

ハレルヤ

「オレに変われ」

レンゲル

「ああ、分かった」

レンゲルは何かを了承した。そして、

レンゲル（ハレルヤ）

「待たせたな！これから真打ちの出番だぜ」

先ほどとは違い、荒々しい言葉を発するレンゲル。彼は超兵であり、今の人格は、超兵ハレルヤのものである。

キックホッパー

「なめるな！」

パンチホッパー & キックホッパー

「クロックアップ」

『CLOCK UP』

またしても、超高速の世界に入ってしまった。もう打つ手は無いかに思われたが、

『RUSH』

レンゲル（ハレルヤ）は冷静にクラブの4のライノセラスラッシュを発動させて、連続で攻撃を放った。

そして、ホッパーを強制的に引きずり出した。

レンゲル（ハレルヤ）

「ヘッ、見えなきゃ引きずり出せばいいんだよ」
パンチホッパー

「テメエ、今オレを、笑ったな。ブチ殺してやる!!」

ファム

「ハレルヤが押されている」

？

「マリー、ここは私に任せろ」

ファム

「ソーマ？分かったわ」

ファム（ソーマ）

「ありがとう、マリー。行くぞ!」

ランス&ラルク

「「ハイッ!!」」

ファムもレンゲルと同じく超兵であるため、二つの人格を持つ。今は超兵マリーの人格に変わった。

牢屋

？

「スメラギさん、どうなっちゃうんです?」
スメラギ

「分からないわ、ミレイナ。でも刹那達がきつと来てくれるはずよ」
ドギューン

突如何者かが銃を発砲し、見張りを打ち抜いた。
？

「さーて、ちょっとした細工もしたし……。大丈夫か?フェルト」
フェルト

「えっ、あなたは・・・」

ブレイド

「行くぞ！」

『SLASH』

シザース

「甘い！」

『GUARD VENT』

ブレイドのリザードスラッシュをシェルディフェンスによって弾かれ、一瞬よろめいたブレイド。

シザース

「今だ」

『ADVENT』

そこでできた隙を見逃すまでも無く、シザースはボルキャンサーを召喚し、追い討ちをかけ、ギャレン、レンゲルと共に吹っ飛ばした。シザース

「とどめは、君達に譲ろう」

キックホッパー & amp; パンチホッパー

「ハッ」

二人はブレイド達に歩み寄った。その時、

ネーナ

「もうやめてえー！ー！！」

突如ネーナが現れ叫んだ。

キックホッパー

「ネ、ネーナ！？」

パンチホッパー

「なんでお前がここに！？」

二人は、突然現れた妹の存在に驚いた。

ネーナ

「二人とももう止めて！どうしてこんなことをするの？」「ドカーン

突如どこからかが、爆発が起こった。

シザース

「クッ、あのあたりには、マインドコントロール装置が」

キックホッパー & amp; パンチホッパー

「グッ、ぐあああああ」

突如ホッパーの二人は苦しみだした。そして

キックホッパー

「ネーナ」

ネーナ

「ミハ兄、ヨハ兄」

再び出合った兄妹。

シザース

「ええい、もうキサマ等に用は無い!」

そういうと、シザースの後ろから、マシンガンを持ったゲルニユートがやってきた。

キックホッパー

「ネーナ!」

キックホッパーとパンチホッパーはネーナを銃弾から庇い、自らがネーナの盾となった。

ネーナ

「ミハ兄、ヨハ兄!」

ギャレン

「チッ!」

『BULLET』

ギャレンはアルマジロバレットのカードを使いゲルニユートを打ち抜いた。

ヨハン

「フッ、久々に会えたのにまた一人のさせるとはな……」
ブレイド

「もついい。喋るな、ヨハン・トリニティ」

ミハエル

「悪いな、ネーナダメな兄貴で・・・」

ネーナ

「そんなことないよ、ミハ兄、ヨハ兄」

ヨハン

「刹那、かつて別動隊のメンバーとして頼みがある」

ブレイド

「なんだ」

ミハエル

「ネーナをよろしく・・・たの・・・む」

それを言い終わると、ヨハンとミハエルは力尽きた。

ネーナ

「ミハ兄、ヨハ兄ーーーーー！」

シザース

「心配するな。すぐにキミも兄の下に送ってあげよう」

そして、シザースの横には貝のアンデットシェルアンデットと植物アンデットプラントアンデットが現れた。

ネーナ

「ミハ兄、ヨハ兄・・・」

ネーナは立ち上がると、カリスラウザーを腰につけ、一枚のカードを持った。

ネーナ

「変身」

『CHANGE』

そして、彼女の体は、ハートをイメージした黒い仮面ライダー、カリスに変身した。

ブレイド

「何!？」

レンゲル

「あの子もライダーなのか？」

シザース

「フン、一人増えようが私の勝利に変わりない。死ねい！」

彼の号令と共に、アンデットはカリスに襲い掛かった。

『COHP』

『TORNADO』

『SPINNING WAVE』

二枚のカードをラウズした後、カリスの体を風が吹き荒れ、必殺コンボ技スピニングウェーブを放った。それも二体同時に。その後、カリスは、二体のアンデットにカードを投げつけ、封印した。

シザース

「な、何!？」

ブレイド

「ネーナ・・・」

カリス

「刹那や皆が頑張っているのにアタシだけ逃げるわけには行かない。だから、アタシはもう逃げない!!」

ED: DAYBREAK'S BELL (ガンダム00OP)

第3話 ブレイドダブルオー 集結！ネオソレスタルビーイング（前書き）

OP: Round ZERO } BLADE BRAVE

第3話 ブレイドダブルオー 集結！ネオソレスタルビーイング

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは、

キックホッパー

「ソレスタルビーイングよ。貴様等の仲間は預かった。返して欲しいくば、この場所まで来い」

刹那

「貴様は、アレハンドロ・コーナー！なぜ貴様がここに！？」

アレハンドロ

「知る必要は無い。なぜなら、君達は私に倒されるのだからな！」
ネーナ

「二人とももう止めて！どうしてこんなことをするの？」

ミハエル

「ネーナをよろしく・・・たの・・・む」

カリス

「刹那や皆が頑張っているのにアタシだけ逃げるわけには行かないだから、アタシはもう逃げない！！」

シザース

「フン、貴様等ごときに何ができる。我々の力を持つてすれば「残念だったねえ」何！？」

声の主を聞くと、そこにはフォルテ達が出た。

フォルテ

「どうやら、あんたも決意を見せたようだね。」

カリス

「へへっ、まあね」

ミスターブシドー

「雑兵達は片付けたぞ」

シザース

「おのれー」

フォルテ達も加勢しようとしたとき

ブレイド

「まで、お前達は手を出すな」

カリス

「ここはアタシ達にまかせて」

フォルテ

「あんた達……。まかせたよ」

ブレイド

「ああ、みんな行くぞ」

カリス&ギャレン&レンゲル

「「おう!!」「」」

ブレイド

「ブレイド、目標を排除する」

カリス

「カリス、目標を瞬殺する」

ギャレン

「ギャレン、目標を狙い撃つ」

レンゲル

「レンゲル、目標を粉碎する」

四人のライダーは、一斉にシザースにかかった。

シザース

「ふん」

『STRIKE VENT』

再びシザースピンチを腕に装着し、振り払った。その一撃がカリスに当り、カリスを吹っ飛ばした。

カリス

「キャアアア」

その時、ブレイドがカリスを抱きかかえた。

ブレイド

「大丈夫か？ネーナ」

カリス

「う、うん（何だろう、この気持ち）」

シザース

「死ねーーーーー」

レンゲル

「同じ手は食うか」

『BITE』

『BLIZZARD』

『BLIZZARD CLASH』

レンゲルはシザース目掛けて、ブリザードクラッシュを仕掛けた。

シザース

「クッ、何という力だ。しかし、私には勝てん！」

シザースピンチを振りかざし、ブリザードクラッシュを防いだ。しかし、それによりシザースピンチは破壊されてしまった。

ギャレン

「まだまだ！狙い打つぜ！！」

『DROP』

『FIRE』

『BRNING SMASH』

休む間も与えず、ギャレンがバーニングスマッシュをシザース目掛けて放つ。

シザース

「甘いわ！」

『GUARD VENT』

甲羅を模した盾シェルディフェンスを召喚し、バーニングスマッシュを防いだ。しかし、シェルディフェンスもシザースピンチ同様使い物にならなくなった。

ギャレン

「クソッ」

シザース

「では、止めだ」

『FINAL VENT』

シザースの後ろにボルキャンサーが現れ、シザースを弾いた。シザースは高速回転しながらシザースアタックを発動した。

カリス

「待ってたわ！」

『DRILL』

『TORNADO』

『SPINNING ATTACK』

カリスは迎え撃つために、スピニングアタックを放った。そして、二つの技は相殺された。

シザース

「クッ、そんなバカな」

カリス

「いまよ、刹那！」

『KICK』

『THUNDER』

『LIGHTNING BLAST』

ブレイドはカリスの合図を聞き、ライティングブラストをシザース目掛け蹴り上げた。今度は身を守るものはもう身に着けていない。

直撃である。

シザース

「ぐああああ、こ、この私がこんなところで――――！！」

シザースは断末魔の叫びを叫びながら爆発した。その後、四人は変身を解いた。ただ一人ネーナは

『SPIRIT』

カードの力を使い、戻った。

刹那

「やったな」

ライル

「ああ」

ネーナ

「ミハ兄、ヨハ兄敵は討つたよ」

ネーナの持っているハートの2のカードの絵柄がネーナ自身の物になった。

とそのとき、

ボルキャンサー

「グルルル」

アレルヤ

「しまった、まだこいつがいた！」

そう、倒されたのは、シザースだけであり、ボルキャンサーは、まったく無傷である。全員は変身の構えを取る。

ドガッ

突如、青いライダーがボルキャンサーを蹴飛ばしたのであった。

フォルテ

「あれは、威吹鬼！」

威吹鬼

「狙い撃つぜ！音撃射・疾風一閃」

威吹鬼は音撃管烈風をボルキャンサーに近づけ、トランペットを演奏するかのように清めの音を放つ。

ボルキャンサー

「グオオオオオン」

ボルキャンサーは爆発した。

刹那

「助かった。だが、貴様は何者だ」

威吹鬼

「おいおい。もう忘れたのか？オレのことをさ」

すると威吹鬼は、変身を解いた。すると・・・

ライル

「に、兄さん!!」

そう、ライル・ディランディの兄、初代ロックオン、ニール・ディランディである。彼は、四年前刹那達を助けるために命を落とした。

刹那

「なぜ、貴様がここに」

フェルト

「ニールが私達を助けてくれたのよ」

刹那

「そうか、だがなぜ生きているんだ？」

ニール

「デユナメスから放り投げだされたとき、もうダメかと思ったんだが、フォルテの組織に助けられたんだよ」

フェルト

「そうだったの」

コーラサワー

「なあ、そろそろこっから出たほうが良くねえ？」

ミレイナ

「そうです。もう長居は無用です」

ニール

「そうだな。それと、オレ達の基地に案内するぜ。マイティライダーズだな」

刹那

「マイティライダーズ？」

フォルテ

「そこで教えてやるよ。ヤツらの正体を」

刹那

「ああ」

拠点

スメラギ

「さて、私達は新たな仲間も加え、新生ソレスタルビーイング、ネオソレスタルビーイングを結成します」

こうして、スメラギの発案の元、ネオソレスタルビーイングが結成された。従来のメンバーに加え、

ネーナ、コーラサワー、カティ、ミスターブシドー、沙慈、ルイスが加わった。

スメラギ

「我々ネオソレスタルビーイングはマイティライダーズに協力します」

フォルテ

「ああ、それじゃ、ここがあたし達の基地、ライダーキャリアさ」

フォルテに案内された基地は、バッタをモチーフにした基地である。

司令室

？

「ライダーメンバーを連れてきたようだな」

フォルテ

「ハッ、ビッグコンボイ指令」

フォルテが挨拶をした相手は、大型のロボットである。

カティ

「あなたが、この部隊の指揮官ですか？」

ビッグコンボイ

「私じゃない。七緒、長官は、どこだ？」

七緒

「長官ならもうじき……。あ、みなさん、お待ちせしました。長官がただいま来られました」

ネーナ

「ウッソー」

刹那

「こいつが、マイティライダーズの長官……」

果たして長官の正体は？そしてヤツらの正体は？（続）

おまけ

ネーナ

「今日は2月14日、バレンタイン！告白はムリでも、せめて刹那にチョコは、送らなきゃ！！」

ネーナは手作りのチョコを持って、刹那の部屋の前にきた。しかし、タイミングが掴めずにまだ戸惑っていた。

ウィーン

刹那

「ん？」

ネーナ

「せ、刹那！！（どーしょー、まさかこんなタイミングで会うなんて）あ、あの、このチョコ受け取ってください！！」

刹那

「ああ、ありがとう」

刹那はチョコを手にとると、笑顔でそう返した。

ネーナ

「刹那……。ありがとう」

そして刹那の頬に軽くキスをした。

ED：DAYBREAK'S BELL（ガンダム000p）

第3話 ブレイドダブルオー 集結！ネオソレスタルビーイング（後書き）

はい、ブレイド編終了しました。

ちなみにこのフォルテとビッグコンボイと七緒は、それぞれ「GAの世界」「ビーストウォーズネオの世界」「ブリーチの世界」出身の人達じゃありません。

この秘密も次回教えます。

ちなみに、最後のおまけは、更新日がバレンタインにちなんでです（笑）

第4話 とあるクウガの超電磁砲（前書き）

OP：仮面ライダークウガ！

第4話 とあるクウガの超電磁砲

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは、

ブレイド

「大丈夫か？ネーナ」

カリス

「う、うん（何だろう、この気持ち）」

シザース

「ぐああああ、こ、この私がこんなところでーーーー！！」

ネーナ

「ミハ兄、ヨハ兄敵は討ったよ」

ニール

「オレ達の基地に案内するぜ。マイティライダースのな」

ビッグコンボイ

「七緒、長官は、どこだ？」

七緒

「長官ならもうじき……。あ、みなさん、お待ちせしました。長官がただいま来られました」

刹那

「こいつが、マイティライダースの長官……」

？

「やつほーーーー。あたしやちる。よろしくねーーーー」
なんと現れたのは、小さい少女だった。

コーラサワー

「オイオイ、マジかよ。こんなガキが長官って……」

？

「確かに信じられないけど」

？

「でも実力は本物よ」

全員は声のした方向を見る。すると現れたのは、二人の男女だ。

スメラギ

「リヒティ、クリス・・・」

そう、その二人は、四年前の戦いで、死んだはずのクリスことクリステイナ・シエラとリヒティことリヒテンダール・ツエーリである。リヒティ

「イアンさん、お久しぶりです」

イアン

「お前等、四年前に死んだはずじゃ？」

？

「私もいるぞ。ラッセ」

ラッセ

「JB・モレノ！あんたも生きてたのか！？」

すると今度は、メガネをかけた青年がスメラギの前に近づいてきた。
？

「やあ、クジヨウ。元気だったか？」

スメラギ

「ビリー！」

ビッグコンボイ

「ビリーを除いた四人は私が偶然君達の世界にきたときに助け出したんだ」

スメラギ

「そうだったの」

ビッグコンボイ

「しかし、ニールとモレノは、比較的には大丈夫だったが、クリスとリヒティは危険な状態になっていた。だから我々は止むを得なく、彼等二人をオルフェノク手術せざるを得なくなった。助けるためと

はいえ、どうか許して欲しい」

スメラギ

「いいのよ。またみんなと会えたんだから。でもなぜビリーがここに？」

ビリー

「ボクはこの組織にスカウトされたんだ」

刹那

「さて、そろそろヤツらの正体とお前達のことを知りたい」

七緒

「分かりました。まず我々に付いて。我々はソウルロイドという存在です」

ネーナ

「そうる・・・ろいど？」

ミレイナ

「なんですか？ソレ」

七緒

「我々はいくつもの世界の情報から一人の存在からのデータを読み込まれたのです。もちろん姿形だけではなく、性格もオリジナルと同じなのです」

コーラサワー

「つーことは、アンタ等ロボットか！？」

七緒

「まあ、そうゆうことです。では次に、ヤツらはいくつもの次元の悪が結集された悪の組織、大ショッカー。ヤツらの狙いは全ての世界を侵略することです」

ラッセ

「ようするに、世界征服か」

七緒

「はい。そして、その大ショッカーを裏で操っているのが」

刹那

「アレハンドロ・コーナーがあの方といていたヤツか」
七緒

「そうです。大ショツカーの首領の名は、シャドームーン!」
「ちょっと待った!」
「へッ?」

すると、いきなり、やちるが声を放った。
やちる

「まてまてー」

なんとやちるは、チヨウチヨを追いつけ回していた。
七緒

「長官!ちゃんと話をきいてください!」

それを見たネオソレスタルビーイングノメンバーは

N C B

「大丈夫かなあ・・・」

そのとき、

クリス

「リーダーに、反応あり!この反応は・・・クウガです!」

健

「次はクウガのライダーフォースか・・・京介!桐乃!出番だ!」

トビア& amp;ベルナデット

「了解」

その声と共に、二人の男女が現れた。一人は金髪の少年トビア・アナログス。もう一人の少女は、ベルナデット・ブリエット。

トビア

「早見指令。次は俺達に任せてもらいますよ」

健

「ああ、期待している」

そういうと、トビアは、マシンに乗っていった。

ルイス

「あれ、アンタは行かないの?」

ベルナデット

「大丈夫です。だって私達は二人で一人の兄妹ライダーです」
ミレイナ

「そんなことより、聞くべきことがあるです」

ミレイナはそう言うと、クリスとリヒティのほうを見る。

ミレイナ

「つかぬ事をお聞きするです。二人は恋人なのですか？」

クリス & amp; リヒティ

「「そうだよ」」

ミレイナ

「おお、乙女の勘が当たったです」

そしてミレイナの後ろのモニターは大都市を飛び回るクワガタムシの絵があつた。

トビア

「ここがこの世界の学園都市か。ベルナデット、とりあえず情報を送っとく」

トビアはスタッグフォンで数々の情報を流していった。

ベルナデット

「検索を始めます。キーワードは学園都市、レベル5、超電磁砲この三つね。そこから出る名前は・・・」

そしてベルナデットは一冊の本を取り出す。その本のタイトルには、御坂 美琴と書かれていた。

ベルナデット

「トビア、クワガのライダーフォースを浴びたのは、御坂美琴という少女よ」

トビア

「よし、早速「黒子ーーーー！」な、なんだ!？」

トビアは、いきなりの爆発音に驚いた。

美琴

「あんたってやつは、まいどまいどー!」

黒子

「お姉さま、これは黒子の愛情表現ですよ「やかましー！」「へぶっ」

それを聞くと、美琴は、黒子を蹴飛ばす。

トビア

「なあ、御坂美琴つてのは、アンタか！？」

美琴

「そうだけど」

黒子

「あなた、私のお姉さまになにをするつもりなんです「あんたは黙ってなさい！」ぎゃふー！」

またも美琴は黒子を蹴飛ばす。

トビア

「さっそくだけど、アンタに「キヤーー」今度は何だ！？」

京介と美琴（ついでに黒子）は悲鳴が聞こえた場所へ近づいた。すると、

美琴

「な、何なのあいつら・・・」

美琴は驚いた。なぜなら、相手は、グロンギの怪人だからだ。一体はクモの怪人ズ・グムン・バ。もう一体はサイに似た怪人ズ・ザイン・ダ。

京介

「おい、お前。これを腰につける」

トビアはアークルを美琴に渡す。美琴はそれを腰につける。

トビア

「ベルナデットー！」

トビアは腰にダブルドライバーを付ける。同じ頃、基地にいるベルナデットの腰にもダブルドライバーが現れた。そして、二人はメモリを持った。

『CYCRONE』

『JOKER』

トビア& amp・ベルナデット

「変身！」

『CYCRONE JOKER』

ベルナデットが倒れ、トビアはWCJサイクロン ジョーカーになる。

W

「さあ・お前の罪を数えろ！！」

美琴

「よしアタシも！変身！」

美琴の腰に再びアークルが現れ、美琴の姿がクウガに変わった。

クウガ

「おっし」

クウガはズ・グムン・バと、Wはズ・ザイン・ダと戦う。クウガは慣れない戦いにもかかわらず、ズ・グムン・バを押している。ズ・グムン・バは糸を吐き出し、クウガの動きを封じようとするも、クウガは距離をとり、糸をかわした。そして、

クウガ

「これで、終わりよ！」

必殺のマイテキックを発動させた。直撃を食らったズ・グムン・バの腹に封印のマークが現れ、爆発した。一方ズ・ザイン・ダと戦っているWは苦戦していた。相手のパワーに押されているからだ。

W

「ベルナデット！このままじゃちがあかねえ！」

W（ベルナデット）

「ここはヒートメタルでいきましょう」

W

「ああ！」

『HEAT METAL』

Wの姿がHMヒートメタルに変わると、メタルシャフトを片手に持って、ズ・ザイン・ダにダメージを負わせている。

W^{トビア}

「フィニッシュだ！」

『METAL MAXIMUM DRIVE』

W

「『メタルブラウディング！』」

炎を纏った一撃が決まり、ズ・ザイン・ダは爆発した。

W^{トビア}

「よしこれで任務は終わったな」

二人が変身を解こうとすると

？

「ちよつとまちな！」

すると声の元から二人の黒ずくめの男とコンドルの怪人ラ・ドルグ・グ二体が現れた。

？

「貴様等の首はここでいただく。行くぞウォッカ！」

ウォッカ

「了解」

ジンとウォッカの上から、暗雲が出できた。

ジン&ウォッカ

「『変身』」

ジンの体が黄金のライダーゴルドラになり、ウォッカはシルバラに変身した。

シルバラ

「さーで、お前等はどんな音で潰れるかなあ？」

クウガとWはゴルドラとシルバラに戦いを挑んだ。しかし、相手はライダーということもあり、先ほどのようにはいかなかった。

W^{トビア}

「オイ！こいつ持って超変身って叫べー！」

Wはクウガにメタルシャフトを投げ渡した。

クウガ

「へっ!?!」

W^{トビ}

「早く!」

クウガ

「ああーもう超変身!」

するとクウガの体が青くなりメタルシャフトもドラゴンロッドに変わった。

クウガ

「よし、これなら!」

スピード戦を得意とするドラゴンフォームに変身したクウガは連続攻撃を仕掛けた。

シルバラ

「全然効かねえなあー」

クウガ

「ウ、ウソ!?!」

シルバラ

「そろそろテメーの潰れる音を聞かせてもらっぜ」

そっとうとシルバラは棍棒を振り回した。

クウガ

「超変身!」

今度は紫色のタイタンフォームに変わった。そして武器も、タイタンソードになった。そして、タイタンソードで、棍棒を受け止めた。

シルバラ

「何!?!」

一方WはCJに変わり、ゴルドラと格闘戦を繰り広げた。しかし、ゴルドラは雷をくりだし、Wを圧倒していった。

ゴルドラ

「さて、ウオッカこの辺にしておくか」

シルバラ

「えっ!?!なんでですか兄貴?」

ゴルドラ

「後は怪人に任せてもよからう」

シルバラ

「そうですね。お楽しみは後にとっておくか。アバヨ！」

そういうと、二人はオーロラの壁に消えてった。

トビア
W

「待ちやがれ！」

W（ベルナデット）

「トビア！今は怪人を倒すほうが先よ！」

『LUNA TRIGGER』

クウガ

「超変身！！」

WはLTに変身し、クウガは緑のペガサスフォームに変身していった。二人はそれぞれ

トリガーマグナムとペガサスボウガンを構え、

『TRIGGER MAXIMUM DRIVE』

W

「トリガーフルバースト！！」

空を飛ぶラ・ドルグ・グに向かって攻撃を放った。一体はトリガーフルバーストで、もう一体はブラストペガサスで、ラ・ドルグ・グに放った。そりて直撃を受けた二体は爆発した。

トビア
W

「やったな」

クウガ

「ええ」

二人はサムズアップした。

司令室

やちる

「あつ、トビちゃんお帰りー」

トビア

「一人余計なのもいるけどな」

七緒

「余計なの？」

トビアと美琴だけではなく、黒子も加わっていた。

美琴

「つーか黒子！なに付いて来てんのよ！」

黒子

「お姉さまの貞操を私がまも「逆に奪うのはあんたじゃー！ー！！」
りげるぐっ！」

黒子の言葉にキレた美琴のアップアが決まった。（笑）

トビア

「次は誰が行くんだ？」

やちる

「既にジミーを向かわせたよ」

はたしてジミーとは？そしてモニターに映る四葉のクローバーとφ
のマーク。これは、どこの世界を現すのか？

ED: only my railgun（とある科学の超電磁砲OP）

第5話 フレッシュプリキュア555（前書き）

久々の更新です

OP: Justis

第5話 フレッシュプリキュア555

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは

七緒

「ヤツらはいくつもの次元の悪が結集された悪の組織、大ショッカリ。ヤツらの狙いは全ての世界を侵略することです」

トビア

「早見指令。次は俺達に任せてもらいますよ」

ベルナデット

「私達は二人で一人の海賊ライダーよ」

W

「さあ・・・お前の罪を数えろ！！」

美琴

「よしアタシも！変身！」

トビア

「次は誰が行くんだ？」

やちる

「既にジミーを向かわせたよ」

四つ葉町

こここの公園で四人の少女と二人の青年がいた。

カオル

「へーっ西君。タコ焼きとドーナツを合わせたタコ焼きドーナツ。コレイケるよ」

ウエスター

「えっ、マジすか？ありがとうございます」

その公園のドーナツ屋でその店長のカオルちゃんに自分の考えた

ドーナツをほめてもらっている西隼人ことウエスター。実は彼はこの世界の住人ではない。いや、正式には彼ともう二人である。ラブ

「やつほー。ウエスター」

美希

「どうも」

ブッキー

「それじゃ私達もそろそろ練習しようか」
せつな

「ええ、そうね」

先ほどの四人の少女、桃園ラブ、蒼乃美希、ブッキーこと山吹祈里そして東せつな。彼女達四人は、ダンスユニットクローバーのメンバーであり、かつて、メビウスから世界を救ったプリキュアである。ちなみにかつてせつなは、プリキュアになる前は、イースとして、プリキュアの敵として立ちふさがった。ちなみにせつな達元ラビリンス3幹部はラビリンスの再建のために帰っていったが、アカルンやホホエミーナの力でこの世界へ来ているのだ。

サウラー

「おい、みんな」

ラビリンス3幹部サウラーこと南瞬がふとなにかに気づいた。
タルト

「どないしたん？サウラーはん」

サウラー

「あれ」

サウラーの視点に映るのは、一人の黒服の男性が一人でミントンの素振りをしていた。

美希

「なにアレ？」

ブッキー

「何でラケット振り回しているの？」

せつな

「ところでラブ」

ラブ

「何？」

せつな

「大輔の告白への返事なんだけど」

ラブ

「遠まわしに振っちゃったよ。だって、今日はせつなとのデートなんだもん」

前日

クラスメイト

「ラブ今日はなんだかご機嫌ね」

その様子を横から見る少年知念大輔

裕喜

「早く帰ろうぜ」

ラブ

「明日はデートなんだ」

大輔

「な、何！？アイツ彼氏いたのか？」

シヨックを隠せない大輔

健人

「さあ？」

裕喜

「いいから帰ろうぜ」

せつな

「ラブったら」

そのとき、黒服の男性がこちらに気づいたのか、ラブ達の方に近づいていった。

男性

「君達は、桃園ラブに東せつなだね？」

ラブ

「そうですけど」

山崎

「俺の名前は山崎退。早速だけど、君たちにライダーになってほしいんだ」

全員

「ええっ」

山崎はラブ達にライダーフォースや大シヨッカーのことについて説明した。

ラブ

「あたしとせつなが浴びた光があんな重要な物だなんて」

美希

「それでラブとせつなだけなんですか？」

山崎

「ああ、残念ながらこの二人以外はライダーの力を使いこなせないからね」

ウエスター

「そうか」

一瞬の沈黙。そして
ラブ

「あたし、やるよ！」

せつな

「私も、精一杯、頑張るわ！」

山崎

「そうか、それじゃ、君達にライダーズギアを渡さないとな」

山崎は二つのトランクケースを取り出した。二つのトランクには、スマートブレインと書かれている。

ラブ

「これって？」

山崎

「君達がライダーになるためのアイテムさ。あ、あと君達の親にはちゃんと saying おいたから」

サウラー

「根回し早いな」

ラブ

「よしそれじゃ」「ピーチはん、のんびりしていいんでっか？」「へっ？」

ラブとせつなが時計を見ると

ラブ

「やっぱー！急ごう、せつな！」

せつな

「ええ」

ラブとせつなはダッシュで公園を出た。

山崎

「おい君達、どこいくんだああああ」

その時

ドーン

タルト

「な、なんや？」

ブッキー

「一体何？あの爆発は！？」

山崎

「言ってみよう」

山崎達は公園を出た。

クローバーストリート

ウエスター

「確かこのあたりからだ」

ブッキー

「あつ、あれ！ラブちゃん、せつなちゃん！」

ブッキーが声のした方向を見るとラブとせつながいた。

ラブ

「ああ、ブッキーか」

せつな

「ケーキバイキング、台無しになっちゃったよ。今日のデートも」とその時
？

「だーしゃつしゃつしゃ、みーたーか！これがアタシの新商品携帯バズーカの威力を！」

と一人の中年が灰色の怪人と共に現れた。

山崎

「オルフェノク！！それとお前は誰だ！」

ステイル

「どーも始めまして、アタシは武器商人のステイル。以後お見知りおきを」

サウラー

「この爆発は貴様の仕業か！」

ステイル

「だつたらなあに？」

とその時

ラブ

「ねえ、ミキタン。この爆発って」

せつな

「あいつの仕業なの？」

美希

「え、ええ」

美希が言い終わった瞬間ラブとせつなが立ち上がった。
ラブ

「あいつのせいで、デートが
せつな

「ケーキバイキングが」

ラブ&せつな

「台無しになったってわけね」

立ち上がった二人は笑っていたが、目の奥は笑っていなかった。それもそのはず二人の瞳にはハイライトが消えていた。そして、二人の顔になにやら模様のものが浮かび上がった。そして二人は敵の怪人と同じオルフェノクとなった。ラブはオオカミの特性を持つウルフォルフェノクに、せつなは馬と西洋騎士を合わせた感じのホースオルフェノクに。それを見た一同は

一同

「……えええええー！ー！ー！？」

美希

「ちょ、ちょっとこれどういうこと！？」

ブッキー

「何で二人があんな姿に！？」

ウエスター

「オイお前！イス達に何した！？」

山崎

「し、知らないって、俺も何がなんだか」

すると、山崎はズボンのポケットからスタックフォンを取り出した。

山崎

「長官！どういことですか！？二人ともオルフェノクになりましたよ！」

やちる

「あたしがサービスで加えておいたよ」

山崎

「何余計なモン付け加えているんスカ！？」
タルト

「あ、悪夢再びや」

ウエスター

「どうした兄弟!？」

タルトはアイスを一人で平らげた後のことを思い出した。(フレプリ30話)それを聞いた山崎は

山崎

「お前が悪いんじゃないかあああああ！」

とキレてタルトをミントンのラケットで叩いた。

山崎

「もしもし、今オルフェノクとその協力者と思われる武器商人と交戦中。ハイ、すぐに片付けますんで」

オウルオルフェノク

「クソが!!」

スロースオルフェノク

「裏切り者のオルフェノクが!!」

美希

(裏切り者!?)

フクロウ型のオルフェノク、オウルオルフェノクとナマケモノに似たスロースオルフェノクが二人に襲い掛かった。しかしそれより早く、ホースオルフェノクの剣がオウルオルフェノクを、ウルフォルフェノクの拳がスロースオルフェノクを捕らえた。直撃を受けた二体は、青白い炎に包まれ灰になった。

ウルフォルフェノク

「オラー、次はどいつだー」

ホースオルフェノク

「こんなもんじゃ怒りは収まらないわよ」

タルト

「ピーチはん、パッションはん。一旦元に戻ってーな」

そう言われると二人は元に戻った。

ラブ

「で、何？」

山崎

「せっかくだからさ、仮面ライダーになって戦おうぜ」

そついうと、山崎はラブにファイズギアを、せつなにオーガギアを渡した。そして自分もデルタギアを腰につけた。

ラブ

「二人ともいくよ！」

ラブはファイズフォンに変身コード「555」を、せつなはオーガフォンに「000」を入力した。そして山崎は音声コードを放つ。

『STANDING BY』

三人

「変身!!」

『COMPLETE』

ラブは赤いラインの戦士仮面ライダーファイズに、せつなは金色のラインと漆黒のボディを持つ仮面ライダーオーガに、そして山崎は、白いラインの戦士仮面ライダーデルタに変身した。

ブッキー

「あれが、仮面ライダー」

美希

「ホント、カンペキ!!」

ファイズ

「だりやああああ!!」

ファイズは手に持った、ファイズエッジでオコゼの特性を持つステイングフィッシュオルフェノクと戦った。ステイングフィッシュオルフェノクは三叉の槍を振り回したが、それをかわしたファイズはファイズエッジにミッションメモリーを挿入し、ファイズフォンのENTERを押した。

『EXCEED CHARGE』

懐から、必殺のスパークルカットを放った。ステイングフィッシュオルフェノクは青い爆発を起こし、灰となった。さらに後ろから、

ゾウの特性を持つエレファントオルフェノクが突進してきた。しかし、ファイズは腕にファイズショットを身につけ、ミッシヨンメモリーを挿入し、またファイズフォンのENTERを押した。

『EXCEED CHARGE』

グランインパクトを受けたエレファントオルフェノクは、スティングフィッシュオルフェノク同様灰となって死んだ。

マンティスオルフェノク

「ひるむな！全員でかれ！」

リーダー格のカマキリ型のオルフェノクのマンティスオルフェノクの号令を受けたウシ型のオルフェノクオックスオルフェノクとサボテンの特性を持つカクタスオルフェノクが襲い掛かった。

デルタ

「ファイア」

『Burst Mode』

デルタのデルタムーバーとファイズとオーガのフォンブラスターの攻撃を受け、オルフェノク達は後ろにのけぞった。

カクタスオルフェノク

「クソツタレ」

デルタ

「お前の相手は俺だ」

カクタスオルフェノクとデルタ、オックスオルフェノクとオーガ、そしてマンティスオルフェノクとファイズが退治した。

オックスオルフェノクはオーガを巨大な拳で殴りにかかったが、オーガはオーガストランザーを使い、なぎ払っていく。そして

『EXCEED CHARGE』

オーガは必殺のオーガストラッシュでオックスオルフェノクを真つ二つにする。そして、金色のΩの文字が浮き出、オックスオルフェノクは灰になった。

デルタはカクタスオルフェノクを近づけないために、デルタムーバーを撃ちまくっていた。

デルタ

「そろそろだな。チェック」

『EXCEED CHARGE』

デルタ必殺のルシファーズハンマーを喰らい、カクタスオルフェノクは赤い炎に包まれて灰になった。

そしてその場に青い△の文字が浮き出た。

ファイズとマンティスオルフェノクの戦いも終盤になった。ファイズは足にファイズポインターを取り付け、ミッションメモリーを挿入した。

『EXCEED CHARGE』

ジャンプして前方一回転し、円錐状の赤い光を放ってターゲットをロックオンする。ファイズの必殺技

クリムゾンスマッシュを放つ。赤いφの文字と青白い爆発を放ち、死んでいった。

デルタ

「これで全滅だな」

ブッキー

「あれ、ラブちゃんとせつなちゃんは？」

ブッキーの言葉を聞いて、全員は周りを見渡す。ラブとせつなの姿がないのだ。

ウエスター

「そういえば、あの武器商人もいないぞ」

サウラー

「ま、まさか」

彼の読みは当たっていた。

路地裏

ファイズとの戦いのドサクサに紛れ逃げ出したステイルである。ステイル

「あ、危なかった。今のうちに逃げられると思う?」「!?!?」

背筋が凍る様な感じが、ステイルを襲った。ゆっくりと後ろを向くと、ラブとせつなが視線にいた。

ラブ

「バイキングの恨み」

せつな

「おもしろい」

二人はオルフェノクとなり、ステイルに歩み寄る。

ステイル

「ぎゃああーーーーー!!」

その後ステイルの姿を見たものは誰もいない。

桃園家

あゆみ

「事情は分かったわ。二人ともいつてらっしゃい」

ラブ

「でも、お母さん。あたし・・・」

あゆみ

「気にしなくてもいいのよ。たとえオルフェノクになろうとも、ラ

ブもせつちゃんも私の娘なんだから」

せつな

「お母さん。ありがとう・・・」

こうして二人は、新たな世界へ旅立った。夢と幸せを守るために。

ED: Let's! フレッシュプリキュア! (フレッシュプリキュ

ア! OP)

第5話 フレッシュプリキュア555（後書き）

ラブとせつながオルフェノクになるという設定は、フレプリ30話をみて面白かったから、やってみたらマッチしました。あとラブの嫁はせつなしかない！みんな知っているよね！（笑）

第6話 しゅしゅ王！！（前書き）

OP:Climax Jump

第6話 しゅじ電王ー！

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは

山崎

「俺の名前は山崎退。早速だけど、君たちにライダーになってほしいんだ」

ラブ

「あいつのせいで、デートがせつな」

「ケーキバイキングが」

ラブ&せつな

「台無しになったってわけね」
ラブ

「でも、お母さん。あたし・・・」

あゆみ

「気にしなくてもいいのよ。たとえオルフェノクになろうとも、ラブもせつちゃんも私の娘なんだから」
せつな

「お母さん。ありがとう・・・」

コーラサワー

「しっかし、ありえねーよ。仮面ライダーがオルフェノクになるなんてよ」

七緒

「元々、ファイズ、カイザ、デルタのベルトはオルフェノクの王を守るためのものですし、サイガとオーガの方は帝王のベルトと呼ばれていましたから。あ、でもサイガはここにはありません」

ルイス

「ねえ、そういえばクリスやリヒティもオルフェノクになったって言ってたけど、あれ本当なの？」

リヒティ

「ああ」

そう言うところクリスは鶴のオルフェノク、クレインオルフェノクとなり、リヒティはヘビのオルフェノク、スネークオルフェノクとなった。

刹那

「そうか、これがお前達の……。だが安心しろオレ達はお前達を見捨てない」

クリス

「刹那……」

ミレイナ

「そういえばさっきカイザのベルトはあるんですね？どこにあるんです？」

京介

「今度の世界には電王だけではなくカイザのライダーフォースの反応もあった。今回はイマジンズだけでなく、侑斗とデネブも向かっている」

今度モニターに移ったのはデンライナーと四隅に置いてある四色のタマゴである。

モールイマジン

「お前の命、いただくぞ……」

あむ

「な、なんなのよコイツ等」

モグラ型のイマジン、モールイマジンの軍団に追われた、日奈森あむ。それと彼女のしゅごキャラ、ラン、ミキ、スウ、ダイヤ。しか

し、後ろは壁となっており、もう逃げ場はない。

ラン

「あむちゃん、まずいよコレ」

とその時

？

「まったくしよーがねーな。オイ、ちょっと体貸せや」

あむ

「へっ？何？何？」

と謎の光があむの体に入り込んだ。すると

ラン

「あ、あむちゃん？」

ミキ

「返事がない。ただの屍じゃないな」

ダイヤ

「まだ生きてるしね」

Mあむ

「うおおおおー！ー！、俺、参上！ー！」

しゅごキヤラ

「「「ええええー！ー！？」「「「

Mあむ

「おっしや！行くぜ！」

Mあむは腰にデンオウベルトを巻きつけた。そして、赤いボタンを押し、ライダーパスをベルトにセタッチした。

『SWORD FORM』

Mあむの身体は時の運行を守る仮面ライダー、電王となった。

電王SF

「もう一度、俺、参上！ー！」
スウ

「あ、あむちゃんに幽霊が取り付いたですー！ー」

電王SF

「オイ、俺は幽霊じゃねーぞー!!」

電王SF（あむ）

「てか、アンタ誰よ!」

電王SF

「俺か？俺はモモタロスだ」
ラン

「モモタロスだってー!」
しゅごキヤラ達は大笑いである。

電王SF

「そこ笑うな！好きでこんな名前になったんじゃねーんだよ!」
モールイマジン

「あー、俺たちの相手は?」

電王SF

「あ、忘れてた」

電王は改めて、モールイマジン達に向かった。

電王SF

「よっしゃー！いくぜいくぜいくぜ!」

電王はデンガッシャーをソードモードに組み替え、モールイマジンに切りかかった。

電王SF

「いくぜ！俺の必殺技パート1!」

『FULL CHARGE』

電王のデンガッシャーがモールイマジンの一人に切りかかり、モールイマジンは爆発した。

電王SF

「もういっちょ!」

？

「先輩、そろそろ変わってよ」

電王SF

「んだよ、しょーがねーな。」

モモタロスは渋々了承した。そして電王は、青いボタンを押し、パスをかざした。

『ROD FORM』

ロッドフォームに姿を変えた。

電王RF

「お前、僕に釣られてみる？」
ラン

「姿が、変わった！」

デンガッシャーをロッドモードに変えて、パスをかざした。

『FULL CHARGE』

デンガッシャーをモールイマジンの一人に投げつけ、必殺のデンライダーキックを浴びせた。その直後、喰らったモールイマジンは爆発した。

？

「次は俺や」

『AX FORM』

金色のボタンを押し、電王はアックスフォームになった。

電王AF

「俺の強さにお前が泣いた」

ミキ

「また変わったー！」

電王は高速の突っ張りをモールイマジンに浴びせ、アックスモードに変えたデンガッシャーをモールイマジンに喰らわせた。

『FULL CHARGE』

電王はデンガッシャーを投げつけ、自分自身も飛び上がり、急降下でデンガッシャーの一撃を浴びせた。そしてヤツもまた爆発した。

電王AF

「ダイナミックチョップ」

電王AF

「後で言うんかい・・・」

？

「クマちゃん！僕がやる！」

？

「よし、リュウタ、まかせたで」

『GAN FORM』

紫のボタンを押し終えた後、パスをかざし、ガンフォームになった。
電王GF

「お前倒すけどいいよね？答えは聞いてない！」
スウ

「またですか！？」

ガンモードに変わったデンガッシャーでダンスを踊るように、モールイマジンを打ち抜いた。

『FULL CHARGE』

必殺もワイルドショットでモールイマジンを打ち抜き、爆発させた。
？

「さて、そろそろ私の出番か」

『WING FORM』

先ほどの四つとは違い、デンオウベルトにパーツがセットされ、パスをセタッチする。

電王WF

「降臨。満を持して」

ダイヤ

「どんだけー」

ウイングフォームとなった電王はハンドアックスとブーメランの二つに変形させたデンガッシャーへ最後のモールイマジンを攻撃をした。
た。

『FULL CHARGE』

必殺技のロイヤルスマッシュが命中し、爆散した。戦いが終わると、ベルトを外し、元に戻る。

あむ

「な、なにがどうなって、てかなにこれ!？」

あむは自分の手元にあるライダーパスの存在に気づいた。と、そこへデンライナーがあむの目の前に現れた。

あむ

「ええええー、今度は何!？」

デンライナーのドアが開き、中からメガネをかけた少女が現れた。

鉄子

「デンライナーへようこそ。パスは拝見しまーす」

あむは鉄子にパスを見せた。そしてあむ達はデンライナーの中に入ってしまった。

モモタロス

「よう、あむ」

あむ

「あ、あんた達まさか」

ウラタロス

「そ、僕達はイマジン。僕はウラタロス」

キンタロス

「俺はキンタロスや」

リュウタロス

「僕リュウタロス」

ジーク

「私はジーク。苦しゅうない」

あむ

「一人だけなんかエラそうだけど」

？

「そして私が」

あむ達は声の方向に振り向く。

エクスカリバー

「デンライナーのオーナー、エクスカリバーである」

全員

「ウゼー……」

モモタロス達はイマジンの事や大ショック、そしてライダーフォースの事も説明した。

ラン

「で、あむちゃん以外の二人ってまさか」

エクスカリバー

「バカめ！！カレーは中辛だ！」

エクスカリバーの発言を無視し、デンライナーは公園に向かった。

公園

NEW電王

「兄さん！！」

カイザ

「ああ、ケリをつけるぞ」

「EXCEED CHARGE」

カイザはカイザブレイガンにミッションメモリーをセットし、剣状のエネルギーを発動させた。そして必殺のカイザスラッシュでモルイマジンに切りかかった。

NEW電王

「デディ、カウントは？」

デディ

「3だ」

NEW電王は三つ数えた後、カウンターストライクを放った。

ゼロノス

「デネブ、いくぞ」

デネブ

「了解」

最後にゼロノスはカードをゼロガッシャーにセットし、スプレンドットエンドを放った。三体のモルイマジンは大爆発を起こした。

その後三人は変身を解いた。そしてデンライナーからあむが降りてきた。

あむ

「やっぱり」

あむの予想通り、カイザの正体は月詠 幾斗。NEW電王の正体は辺里 唯世、そして物影に星名歌唄もいた。

唯世

「日奈森さん、どうしてここへ!？」

ラン

「ところで、あなた誰？」

ランはゼロノスに変身していた青年に声をかけた。

侑斗

「俺は、桜井 侑斗だ」

そこに侑との後ろから黒いイメージンが現れた。

デネブ

「あ、始めまして。オレデネブといいます。お近づきの印にデネブキャンディーを「何やってんだテメーは!」」ぎゃふ!」

侑斗はデネブにドロップキックを放った。

歌唄

「ねえ、あたしもいつていいかな?少しでもイクトや皆の役に立ちたい」

その言葉にモモタロスは

モモタロス

「着いてきな」

こうして、歌唄も仲間になった。

ED:こころのたまご! (しゅごキャラ! OP)

第6話 しゅご電王!! (後書き)

いやー、電王と組むなら、しゅごキャラしかないと思いましたよ。

第7話 神無月の龍騎（前書き）

O P : A l i v e A l i f e

第7話 神無月の龍騎

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは
Mあむ

「うおおおおー！ー、俺、参上！！」

電王SF

「いくぜ！俺の必殺技パート1！」

歌唄

「ねえ、あたしもいつていいかな？少しでもイクトや皆の役に立ちたい」

モモタロス

「着いてきな」

次元移動装置、この中にマイティライダーズのソウルロイド、ルルーシュ・ランページが龍騎のライダーフォースのある世界に向かっている。

ビッグコンボイ

「急げルルーシュ！奴等はどんな手段で来るかわからない！」

ルルーシュ

「了解」

そういうとルルーシュは通信の電源を切った。そしてモニターには月の社と赤い龍写っていた。

ルルーシュ

「確かに・・・、急がねばならないな」

乙橘学園。ここはまほろばの村という場所にある高校。

姫子

「千歌音ちゃんに続いてソウマ君まで・・・いったいどうなっているの」

この学園に通っている普通の女子高生、来栖川姫子は友人である姫宮千歌音と大神ソウマの心配をしていた。ソウマに至っては謎のオリオラによって姿を消したのだが、この世界の事件はこれだけではなかった。それは……

？

「キャアアア」

姫子

「何！？」

突然の悲鳴に姫子はその場所へと向かった。すると……

姫子

「イズミちゃん！」

彼女達は千歌音の追っかけリーダー格であるイズミとその取り巻きであるミサキとキヨウコである。彼女達はなんと鏡の中に引き込まれているのであった。

姫子

「これっていったい……。キャアアア」

姫子がこの光景に驚いているのスキに姫子もまた鏡の中に引き込まれた。そう、鏡の世界ミラーワールドへ……。

姫子

「うっ、ここは？」

姫子は周りをみわたすが、先ほどの学校とは違った場所である。というのも左右が反転しているだけであってそれ以外は学校と同じである。そして姫子の目の前にクモに似た怪物デイスパイダーが現れた。姫子はイズミの靴を見つける。おそらくデイスパイダーに捕食されたのだろう。そして姫子に歩み寄る。

ナイト

「そうはさせない！！」

突如、姫子の前にコウモリの姿をしたライダー、ナイトが現れた。

ナイトはダークバイザーでデイスパイダーを切り刻んでいる。

ナイト

「ダークベネトレイド!!」

ナイトの必殺技、ダークベネトレイドがデイスパイダーに命中した。
デイスパイダーは爆発した。

姫子

「あ、ありがとうございます」

その言葉を聞いたナイトは、姫子の体を抱きしめる。

姫子

「え、ええええ／＼／＼」

ナイト

「よかった……。あなたが無事で」

姫子

「は、はい（なんだろうこの人に抱きしめられると不思議に落ち着く）」

とその頃現実世界では

？

「ここか？」

？

「そうにやーの」

体に鎖を身に付けた大男ギロチとネコ耳と尻尾を生やした少女ネココが鏡の前に立っていた。その時ギロチの携帯がなった。

ギロチ

「俺だ」

？

「ヤッホー、ギロチ。アンタ達のほうはどう？」

ツインテールの明るい少女コロナとメガネをかけた暗い感じの少女レーコ。彼女達はオロチ衆と呼ばれる軍団である。ギロチとネココもオロチ衆の一員である。

ギロチ

「今その場所らしき場所に着いた。これからミラーワールドに行くところだ」

コロナ

「ふーん。あそうそう、ミヤコ様とツバサ様は既に向かったらしいわよ」

ギロチ

「何！？姉貴もこの世界に来ているのか！？」

コロナ

「じゃーねー」

そう言うところ、コロナは携帯の電源を切った。

コロナ

「さーてと。行きますか」

レーコ

「ええ」

コロナとレーコはそれぞれ鏡の前に向かってカードデッキを取り出した。レーコはカメレオンが描かれた黄緑色のカードデッキを、コロナはレイヨウの描かれた茶色いデッキをそれぞれVバックルに差し込んだ。

コロナ&・レーコ

「変身」

二人の姿がそれぞれカメレオン型の仮面ライダーベルデとレイヨウ型の仮面ライダーインペラーに変身し、ミラーワールドの中に入っていた。一方ギロチとネココも変身の体勢に入った。ギロチはサイの描かれた銀色のデッキを、ネココはトラが描かれた青いデッキをコロナたちのように鏡の前にかざした。

ギロチ&・ネココ

「変身」

デッキをVバックルに差し込み、ギロチは西洋甲冑のような外観を加えたサイの仮面ライダーガイに、ネココはトラをモチーフにした仮面ライダータイガに変身した。そして二人もミラーワールドの中に入っていた。
ルルーシュ

「クツ、大シヨツカーめ、もう資格を放ってきたか。こうしてはおれん！」

ルルーシュはすかさず不死鳥が描かれた茶色いカードデッキを取り出す。

ルルーシュ

「変身」

デッキをVバツクルに差し込み、彼は金色の不死鳥を模った仮面ライダーオーデインに変身した。

オーデイン

「嫌な予感がする……。急がねば！」

オーデインもまた、ミラーワールドの中に入っていく。

ナイト

「さあ、ここは危ない。早くこの世界から「そうはさせません」何！？」

『ACCCEL VENT』

突如ナイトの体を素早く斬りつける黒い異形。その正体はコオロギがたの擬似ライダー、オルタナティブ・ゼロとコブラの仮面ライダー王蛇である。

オルタナティブ

「このミラーワールドが貴方の墓場となります。月の巫女、太陽の巫女」

王蛇

「行くぞ」

『SWORD VENT』

オルタナティブはスラッシュダガーを、王蛇はベノサーベル手にナイトと姫子に迫っていった。

ナイト

「クツ」

『SWORD VENT』

ナイトはウイングランサーと呼ばれる槍を掲げ、オルタナティブに向かっていった。

インペラー

「おっ、やってるやってる。それじゃ私達も行きますか」

ベルデ

「そうね」

するとインペラーとベルデも王蛇たちに合流した。

ベルデ

「ツバサ様ミヤコ様、後は私達に」

その言葉を聞いた王蛇とオルタナティブは下がり、観戦していった。

インペラー

「いっけー、モンスター」

『ADVENT』

右脛にセットされているアンクレットタイプのガゼルバイザーにカードをベントインし、彼女の契約モンスター

ギガゼールを初めとしたレイヨウモンスターが一斉にナイトに襲い掛かった。

インペラー

「さらに」

『SPIN VENT』

さらにもう一枚カードをベントインし大型ドリルのガゼルスタップを手にナイトに向かった。

ナイト

「ならば」

ナイトは狙いをベルデに定め、貫こうとした。

『CLEAR VENT』

左太股のバイオバイザーにカードをベントインさせ、体を透明にし、攻撃を回避した。

ナイト

「なっ!？」

姫子

「消えた？」

そしてベルデは透明になった自分自身で自ら殴りにかかった。

ナイト

「クッ」

『GUARD VENT』

ナイトは攻撃に耐えるために、マント状のウイングウォールを予備身に纏った。

ガイ

「させるかよ！」

『CONFINE VENT』

しかし、ガイの発動させたコンファインメントによってウイングウォールは消滅した。

ガイ

「姉貴、待たせたな。お前等自分達ばかり遊んでないで俺たちにも楽しませろ」

タイガ

「そうにやーの」

『STRIKE VENT』

ガイはメタルガラスの頭部を模したメタルホーンを、タイガはデストウィルダールの両腕を模した、巨大な鉤爪のデストクロウをそれぞれ呼び出した。四対一の不利な状況もあってかナイトは次第に押されていった。

王蛇

「さて、ここでそろそろ一人始末するか」

先ほどまで観戦していた王蛇は立ち上がり、姫子に向かっていった。

『FINAL VENT』

コブラを模した小型の杖型召喚機、牙召杖ベノバイザーにファイナルベントのカードをベントインし、必殺技の構えを取る。契約モンスターベノスネーカーの毒液の勢いを乗せて放つ必殺の連続蹴りベ

ノクラッシュを姫子に向かい放つ。

ナイト

「そうはさせない!!」

ナイトはベルデ達を押しつけ、姫子の盾となった。そして、ベノクラッシュを直撃として受け、ナイトは壁に叩き付けられた。その衝撃で、ナイトの仮面が割れ、素顔があらわになる。

姫子

「そ、そんな・・・」

その正体を見た姫子は信じられないような顔をする。なぜなら・・・

姫子

「な、なぜあなたがいるの!? 千歌音ちゃん!!」

そう、姫子の親友であり、恋人の姫宮千歌音である。

千歌音

「わ、私は新たな戦いが起こることをルルーシュから聞いて、大シヨッカーからあなたを守るために、ライダーとなったの・・・。姫子・・・こんな私でも愛してくれる?」

姫子

「あ、当たり前じゃない!! 私は千歌音ちゃんが好き!! いつ何時どこにしようとも、そして何回でも生まれ変わっても!!」

千歌音

「そ、そう。よかった」

その言葉を聞いた千歌音は目を閉じ、永遠の眠りについた。

姫子

「千歌音ちゃん? 千歌音ちゃん!!」

王蛇

「予定とは違ったが、まずは一人」

『TIME VENT』

とそこに光が放たれた。そして光が収まると、死んだはずの千歌音が生き返ったのだ。

千歌音

「わ、私死んだはずじゃ・・・」

姫子

「千歌音ちゃん!!」

生き返ったことを知ると姫子は千歌音に抱きついた。

インペラー

「ちょ、ちよつと!!とどめさしたはずでしょ!」

オルタナティブ

「こ、これは一体」

オーデイン

「気に入ってもらえたかな?私のタイムベントは」

すると姫子達の前にオーデインが現れた。

オーデイン

「姫子とかいったな。君のカードデッキだ。これで大ショッカーから千歌音を守り通せ」

オーデインは龍が描かれた黒いカードデッキを姫子に渡した。

王蛇

「こうなれば、我が大ショッカーの持つオロチ因子全てを注ぎ込んだミラーモンスターでお前達を倒す!」

そういうと先ほど倒されたはずのデイスパイダーが蘇り、デイスパイダー・リボーンとなった。そして、オロチ衆のライダーは灰色のオーロラに消え去った。

姫子

「千歌音ちゃん!!」

千歌音

「ええ!!」

二人はカードデッキを掲げ、Vバツクルに差し込んだ。

姫子& a m p・千歌音

「変身」

そして姫子は龍をモチーフとした赤い仮面ライダー龍騎となった。

ナイトとなった千歌音も龍騎と共に向かい合った。

龍騎

「千歌音ちゃん」

ナイト

「姫子、行くわよ」

龍騎

「うん!!」

『SWORD VENT』

龍騎はドラグレッダーの尻尾を模した剣ドラグセイバーを持ち、デイスパイダーに向かう。ナイトもウイングランサーで迎撃する。デイスパイダーはエネルギー波を放った。しかし、龍騎とナイトは手に持った武器でエネルギー波を切り裂いていく。

龍騎

「これで、呪われた運命を」

ナイト

「終わらせる」

『FINAL VENT』

二人は同時にファイナルベントのカードをベントインする。龍騎はドラグレッダーと共に空中に舞い上がり、ドラグレッダーのエネルギーを受けながら敵に蹴りを決めるドラゴンライダーキックを、ナイトはウイングランサーを芯にマントをドリル状に変形させて突撃する飛翔斬を、デイスパイダーに放つ。その直撃を喰らったデイスパイダーはオロチ因子と共に消滅した。こうして、姫子と千歌音の呪われた運命にも終止符が打たれた。しかし大ショッカーとの戦いはまだ始まったばかりである。

ED: Re - sublimity (神無月の巫女OP)

第8話 キバのごとく(前書き)

O P : B r e a k t h e C h a i n

第8話 キバのごとく

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは

姫子

「千歌音ちゃんに続いてソウマ君まで……いったいどうなっているの」

ナイト

「よかった……。あなたが無事で」

千歌音

「姫子……。こんな私でも愛してくれる？」

姫子

「あ、当たり前じゃない！！私は千歌音ちゃんが好き！！いつ何時どこにしようとも、そして何回でも生まれ変わっても！！」

龍騎

「これで、呪われた運命を」

ナイト

「終わらせる」

七緒

「ご苦労様でした。ルルーシュ」

「ああ。だがオロチ衆もオロチ因子を失った。これからの戦いは優位になるといいが」

リゼルグ

「キバの世界が見つかりました。僕はこの世界にいつてまいります」
桐乃

「キバか……。これで確が見つかったのは六つってわけね」
桐乃が見上げたモニターには満月と時計塔が映っていた。

三千院家。ここには一人の若い執事が働いていた。彼の名は綾崎ハヤテ。親の残した借金の肩代わりにこの屋敷で働いているのだ。ナギ

「お、ハヤテそっちはもういいぞ」

この少女は三千院ナギ。ハヤテを執事に雇った張本人である。ハヤテ

「あ、お嬢様。わかりました」

とそこに二匹のコウモリが現れた。キバット

「ようお前ら、早速だがライダーになつてくれ」

ハヤテ& a m p・ナギ

「ええ!？」

突然の申し出に二人は驚いた。その直後、二人の前に灰色のオーロラが現れた。そこから現れたのはウマの形をした青いファンガイア、ホースファンガイアとネズミのファンガイア、ラットファンガイアが数体現れた。

ハヤテ

「こいつらはファンガイア!なぜ!？」

キバーラ

「つ・ま・り、二人には大ショックと戦ってほしいのよ」

ハヤテ

「お嬢様を守るにはそれしかなさそうですね」

ナギ

「行くぞ、ハヤテ!」

ハヤテはキバットを、ナギはキバーラを手にした。そしてキバットはハヤテの手に噛み付いた。

キバット

「ガブッ!」

その瞬間、ハヤテの顔にステンドグラス上の物が浮かんだ。

ハヤテ& a m p・ナギ

「変身!!」

二人はそれぞれ仮面ライダーキバと仮面ライダーキバラーに変身した。

キバラー（ナギ）

「行くぞハヤテ!」

キバ

「はい!」

同じ頃、銀杏商店街では

リゼルグ

「ここにも追手が来たようですね。ヒナギクさん!!」

緑色の髪をした探偵風の少年リゼルグはヒナギクにイクサベルトとイクサナツクルを渡した。

ヒナギク

「ええ!!」

『レ・ディ・ー』

ヒナギク

「変身!」

『フィ・ス・ト・オ・ン』

ヒナギクは白いボディの聖職者の法衣をイメージした仮面ライダーイクサに変身した。

リゼルグ

「サガーク!」

リゼルグがそう呼ぶとヘビとUFOを合わせた人工モンスターサガークが現れ、リゼルグの腰に付いた。

リゼルグ

「変身!」

サガーク

「ヘンシン」

サガークの右側に付いてあるジャコーダースロットにジャコーダーを差込み、仮面ライダーサガに変身した。

イクサ

「その命、神に返しなさい」

二人の向かう先はタコ型のファンガイア、オクトパスファンガイアである。

同じ頃、白皇学院では、東宮康太郎と瀬川泉が逃げていた。

康太郎

「瀬川こつちだ!!」

泉

「う、うん」

黒いコウモリキバットバット二世はその二人に近づいた。

キバット二世

「少年よ、力がほしいか？」

康太郎

「えっ!？」

キバット二世

「守るための力だ。大切なものをな。ガブリ!!」

二世はキバットと同じように噛み付き、ベルトに付いた。

康太郎

「変身!」

康太郎は黒いコウモリのライダー仮面ライダーダークキバとなった。

泉

「こ、康太郎君」

ダークキバ

「君は僕が守る!」

そういうとダークキバはネズミ型ファンガイアラットファンガイアの大群に向かっていった。ダークキバは強力なパワーで次々とファンガイアを倒していった。

ラットファンガイア

「バ、バカな強い」

ダークキバ

「これで決める」

ダークキバは黒いウエイクアップフェッスルを二世にセットし、一回吹かせた。

キバット二世

「ウエイクアップ・1」

ダークキバは上空に飛び上がり、高速のストレートパンチ「ダークネスヘルクラッシュ」を浴びせ、大爆発を起こした。そしてファンガイアは全滅した。

泉

「東宮君……。ありがとう」

ダークキバ

「あ、ああ／／／／」

イクサ

「行くわよ、リゼルグ君!!」

サガ

「はい!!」

イクサとサガは次第にオクトパスファンガイアを追い詰めていった。イクサはイクサベルトにナックルフェッスルをセットし、サガはサガークに白いウエイクアップフェッスルをセットし吹かせた。

サガーク

「ウエイクアップ」

『イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・アツ・プ』

イクサはイクサナックルに全エネルギーを一点集中させブロウケンファンングをオクトパスファンガイアに向かって殴り、吹っ飛んだ後でサガがジャコーダービュートでオクトパスファンガイアを吊るし、

指でビュートをなぞるとともに魔皇力を送り込みスネークングデスブレイクを発動する。そしてオクトパスファンガイアはガラスのようには砕け散った。

そしてキバは青いフェッスルをセツトし、吹かせた。
キバット

「ガルルセイバー!!」

すると三千院家に擬態してあるキャッスルドランからガルルが変化した魔獣剣・ガルルセイバーが出てきた。左肩と胸と目が青くなりガルルフォームとなった。ガルルフォームは脚力に優れるため、ハヤテと相性がいいのだ。

キバ

「速い！これならいける！よし次は」

緑のフェッスルを吹かせた。

キバット

「バツシャーマグナム!!」

バツシャーが変化した銃、魔海銃・バツシャーマグナムを持ち、バツシャーフォームになった。身体感覚が良く、遠くの敵も次々と撃っていた。そして紫のフェッスルも吹かせた。

キバット

「ドツガハンマー!!」

ドツガが変化した魔鉄槌・ドツガハンマーを手に持ちドツガフォームへと変化した。スピードが下がるパワータイプのフォームだが、ハヤテは難なく使いこなした。

キバーラ（ナギ）

「ハヤテもやっているようだな。よし私も行くぞ！笑いのツボ!」

キバーラもスピードを生かした戦いをする。

ホースファンガイア

「クソッ」

キバ

「いきますよ。ブラッディパンチ」

キバの手が赤く光り、超高速のパンチを繰り出す。そして、ウェイクアップフェッスルを吹かせ、必殺の体制に入った。

キバット

「ウェイクアップ！」

すると周囲は夜に変わり、右脚のカテナの拘束を開放し、上空に飛び上がりダークネスムーンブレイクを放つ。キバールも同時に紫色の光の翼を背面に発生させ、キバールサーベルを逆手に握りソニックスタップを発動させる。そしてファンガイアは砕け散り、庭にはキバの紋章が刻まれた。

キバール（ナギ）

「やったな」

キバ

「ええ」

そして三千院家にヒナギク達 came。そしてリゼルグは大ショッカリについての説明を行った。そしてハヤテ、ナギ、ヒナギク、康太郎、そして泉もライダーキャリアにのった。また新たな仲間ができたが、まだ敵の戦力は計り知れない。これから頼むぞ！ライダー！！

ED：ハヤテのごとく！（ハヤテのごとく！OP）

第9話 カブトビッチマンREBORN(前書き)

OP: NEXT LEVEL

第9話 カブトヒットマンREBORN

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは
キバット

「ようお前ら、早速だがライダーになつてくれ」

イクサ

「その命、神に返しなさい」

ダークキバ

「君は僕が守る！」

泉

「東宮君……。ありがとう」

ダークキバ

「あ、ああ／＼／＼／」

キバラー（ナギ）

「ハヤテもやっているようだな。よし私も行くぞ！」

七緒

「今度の世界にはミーヤさん。あなたにお任せします」

ミーヤ

「分かりました。それで今度はこの世界ですか？」

ミーヤと呼ばれた少女は次の世界について七緒に聞いた。

七緒

「カブトです」

七緒が指差したモニターには大空を飛ぶカブトゼクターが映ってた。
こうしてミーヤはカブトの世界に向かった。

並盛町、この町に一人の少年がある人物を探していた。彼の名は沢
田綱吉。通称ツナ。ボンゴレファミリー次期ボスでもある。もっと

も本人は否定しているが（笑）。ちなみに彼が探している人物は・・。

獄寺

「十代目ーーーーー」

ツナ

「獄寺君、そっちは？」

獄寺

「ダメです。どこにもいません。さっき芝生やクロームにも会ったんですが、手がかりゼロです」

ツナ

「そうか・・・・・」

獄寺と呼ばれた少年、本名獄寺隼人はツナの右腕を自称する実力者である。彼は自動発火式のダイナマイトを投げつけることからハリケーンボムと呼ばれるのである。

リボーン

「なさけねーぞツナ」

ツナ

「リボーン！」

この赤ん坊はリボーン。リボーンは赤ん坊だが、ヒットマンを本業とし、ツナの家教師でもある。

リボーン

「あのオーロラに京子が入り込んだんだ。今のオレたちじゃムリだ」
山本

「クソッ、オレ達じゃ何もできねえのかよ！」

彼の名は山本武。ツナの親友であり、野球部員のエース。彼の武器はを初めとする日本刀である。

ツナ

「そうだ・・・・。あの時京子ちゃんは・・・・」

ツナは京子が異世界に引き込まれたことを思い出した。

その日ツナは京子や獄寺、リボン達と道を歩いていた。ふとツナはテレビのニュースが映っていた。

ツナ

「へー、女子中学生殺人事件か……。しかも家の中学かよ！
怖いー！」

京子は一瞬表情を曇らせる。その時灰色のオーロラが突然現れ、京子を引き込んだ。

ツナ

「京子ちゃん！！」

京子

「沢田くーん！！！」

そして現代に至る。

ツナ

「とにかく一旦家に戻ろう。ハル達にも連絡を……」

そのとき一人の中年男性がツナ達の前に現れた。彼は根津銅八郎。元並盛中の教師である。

獄寺

「なんであんたがいるんだ？クビになったんじゃないのかよ」
すると根津は緑色の怪物、ワームサナギ体となった。

クローム

「十代目！！！」

ハル

「はひつ、なんですかー！」
了平

「なんなんだこいつは！？」

坊主頭の少年は京子の兄の笹川了平。眼帯の少女はクローム髑髏としてもう一人の少女は三浦ハル。共にツナの仲間である。するとワームの近くに灰色のオーロラが現れ、大勢のワームが表れた。

ツナ

「こ、こいつ達、一体・・・」

とその時

ザビー

「ライダーステイング!!」

『RIDER STING』

とザビーが現れ、ワームの一部を爆発させた。

ザビー

「まさか一気に全員見つけるとは・・・。とにかくライダーになつてください」

獄寺

「ああ!?! てめー何様のつもり「待つて、獄寺君!!」十代目!?!」
ケンカ腰状態の獄寺はいきなりツナの静止で止めた。

ツナ

「京子ちゃんを助けるために力が必要かもしれない・・・。だからなつてやるよ!! ライダーってやつに!!」

するとツナの近くにカブトゼクターが現れた。他の仲間にもゼクターが来た。獄寺と山本と了平にはカブティックゼクタークロームにはダークカブトゼクター、そしてハルにはガタツクゼクターが現れた。それらを取り、ツナ・ハル・クロームはライダーベルトに、獄寺、山本、了平はライダーブレスにそれぞれのゼクターをセットする。

ツナ・ハル・獄寺・山本・了平・クローム

「変身!!」

『HENSHIN』

ツナとクロームはそれぞれカブトムシをモチーフとしたカブトとダークカブトに、ハルはクワガタムシモチーフのガタツクに、獄寺はコーカサスオオカブトモチーフのコーカサスに、山本はヘラクレスオオカブトモチーフのヘラク스에、そして了平はケンタウルスオオカブトをモチーフとしたケタルスに変身した。なおカブト、ダーク

カブト、ガタツクはマスクドフォームである。

カブト・ガタツク・ダークカブト

「『キヤストオフ！』」

『CAST OFF』

『CHANGE BEETLE』

『CHANGE STAG BEETIE』

キヤストオフの衝撃によって飛び出たアーマーが大半のワームに当たり、爆発した。

ワーム

「グウウウウ……」

さつき根津に擬態したワームは脱皮し、クモ型のワーム、アラクネアワームになった。アラクネアワームは突然素早いスピードで攻撃していった。クロックアップである。

ガタツク

「はひつ、消えた！？」

ヘラクス

「違う、これは高速移動か！」

カブト

「は、速い！！」

ザビー

「クロックアップを使ってください！！」

カブト

「分かった、クロックアップ！！」

『CLOCK UP』

カブトは超高速の世界に入り、ワームと戦っている。

コーカサス

「オレ達はザコ掃除だ！！二倍ボム」

コーカサスは変身前でも使ったダイナマイトでワームを倒していく。
ダークカブト・ガタツク

「『ライダーキック！！』」

『RIDER KICK』

ガタツクとダークカブトは得意の必殺キックでワームを倒していく。
ヘラクス・ケタロス

「ライダービート!!」

『Rider Beat』

ライダービートによって強化されたパンチヘワームを殴り倒す。

カブト

「うおおおおお!!」

カブトも超高速の世界でアラクネアワームを滅多切りにした。そして

『CLOCK OVER』

二人とも超高速の世界から帰ってきた。アラクネアワームはカブトの後ろから不意打ちを仕掛けようとする。

ガタツク

「ツナさん!!」

しかしカブトはゼクターのボタンを冷静に押し、

『1, 2, 3』

カブト

「ライダーキック!」

『RIDER KICK』

電子音がなった後、カブトは後ろに振り向き、至近距離から上段廻し蹴りを叩き込んだ。それを喰らったアラクネアワームは爆発した。これでワームは全滅した。

ザビー

「さすがですね」

するとザビーは変身を解きミーヤの姿に戻った。そう、このザビーはミーヤが変身したものである。

コーカサス

「女!? オレは女に助けられたのか・・・」

ケタロス

「きにすんなって、んなこと」

カブト

「頼みがあるんだ」

ミーヤ

「わかってます。京子って人を助けるんでしょ」

リボン

「それなら話が早い。さつさとお前達の基地に案内しろ」

こうしてボンゴレファミリーはライダーキャリアに案内された。

姫子

「ええっ！？あなた達も別世界に友人を？」

ツナ

「あなた達もってことはもしかして」

千歌音

「ええ、大神君のあのオーロラに引き込まれて……」

ツナ

「そうか……。でもこれだけの仲間がいるんだ！きっと見つかるよー！」

ビッグコンボイ

「そうだな……。さて次の世界は……。アギトか」

いつの間にか上のモニターは地球と悪魔の尻尾を持った少女が映っていた。これはどの世界を示すのか……。そしてこの世界のライダーは？

ED: Drawing days (家庭教師ヒットマンREBORN! NOP)

第10話 アギTOLOVER（前書き）

。 今日感想が久々に来たんですが・・・ダメだしされました・・・

でもこれではめげません！！文才ゼロですが見守ってください。

OP：仮面ライダーAGITO

第10話 アギTOLLOVER

前回までの仮面ライダーSPIRITS NEOは

ツナ

「京子ちゃん!」

京子

「沢田くーーーーん!」

ザビー

「まさか一気に全員見つけるとは……。とにかくライダーになつてください」

ツナ

「京子ちゃんを助けるために力が必要かもしれない……。だからなつてやるよ!!ライダーってやつに!!」

ツナ

「これだけの仲間がいるんだ!きっと見つかるよ!」

シーン

「この世界にはアギトがいるな……。さてと、ん?」

この世界を任されたシーンは騒ぎに気づく。

シーン

「アンノウンか……。よし!」

アンノウンの潜在を感知したシーンは、すぐさまバイクを騒ぎの方へ向け走り出す。

リト

「うわっ、何なんだよ!コイツら!」

大量のアリ型アンノウン、アントロードとジャガー型のジャガーロード三体に追われている少年結城リトは必死に逃げ出す。

ララ

「リトーーーー、助けてーーーー」

リト

「ララか！？いつもの発明で、って助けて？」

リトはさっきの声で疑問に思うそうなぜならピンク色の髪の少女ララ・サタリン・デビルークとリトの妹

結城美柑もまたアンノウンに追われていたのだ。

リト

「お前等もかい！！ってか発明品があつたろ！」

ペケ

「全部修理中として・・・」

ララの頭の髪飾りが訳を話す。実はこの髪飾りはコスチューモロボットペケでありララの服を担っているのだ。なおララは地球より遠く離れたデビルーク星出身である。

美柑

「それより、もう囲まれたよ！！」

美柑以外

「ええええ」

美柑の言うとおりであった。すでにアントロードに囲まれているであつた。もうダメかと思つたその時、ズバッ！！！！

突如アントロードの一角が倒された。美柑と同じぐらいの金髪の少女が現れた。ただし、彼女の腕はそのまま刃物になっていた。

リト・ララ・美柑

「ヤミ（ちゃん）（さん）！！」

彼女は金色の闇。通称ヤミ。彼女は宇宙で最も危険視されている殺し屋であり、かつてはリトの命も狙つたが、今ではすっかり地球に溶け込んでる。なお彼女は、体内のナノマシンによって、髪の毛や腕など自分の身体のある器官を自在に武器に変身させ戦う能力を持つ。先ほどの刃物はその効果である。

リト

「助かったぜ!!」

ヤミ

「しかし、今回ばかりはさすがの私も厳しいようです」「ならオレが力を貸すぜ」「えっ?」

するとバイクの音がリト達の方に近づいた。シーンである。

リト

「あなたは!?!」

シーン

「オレはシーン・ピアス。ライダーを探しているものだ」

シーンはリトに光球を体に入れ、ララにバックルインジゲータを渡した。

リト

「ひょつとして・・・ライダーってオレ達のこと?」

シーン

「そうだ。君達二人はラーダーフォースを浴び、ライダーの力を得た。共に大ショッカーの野望を防いでほしい」

ララ

「いいよ」

リト

「それじゃあ・・・いくぜ!!」

するとリトの腰にオルタリングが現れた。

リト・ララ・シーン

「!」「変身!!」「!!」

ブーーーーーン

リトは大地の力を身体に宿した龍の戦士、仮面ライダーアギトに、ララは青いロボットライダー仮面ライダーG3-Xに、そしてシーンは新緑のカミキリムシライダー仮面ライダーギルスになった。アギト

「す、すっげーーーー」

G3-X

「かつこいいー」

ギルス

「行くぞー!」

アギト・G3-X

「おう!」

アギト達はアンノウンに向かっていった。アギトはまずストームフォームになりストームハルバートの刃を展開させ超高速で回転させて突風を起こし、必殺のハルバードスピンですれ違いざまにアントロードを切りつける。続いてフレイムフォームになり、鐔の角を展開させたフレイムセイバーでアントロードを切り裂いた。

G3-X

「いっけー」

G3-Xはケルベロスを使い、アントロードを次々と打ち抜いていた。

ギルス

「やるな!」

ギルスもまた、野獣のような戦闘スタイルでアントロードを切り裂いていく。そして残る敵はジャガーロードだけとなった。

ギルス

「うおおおおお」

ギルスはジャガーロードの一人パンテラス・ルテウスに目掛けてギルスヒールクロウを放った。ルテウスはよろけている。

G3-X

「よし私も!ケルベロスファイヤー!」

パンテラス・トリステイスを照準に定め、必殺のケルベロスファイヤーを発射した。

アギト

「最後はオレだ!」

そして、アギトもクロスホーンを展開し、地面に発生した6本角を

模したエネルギーを右足に溜めてパンテラス・アルビュスに向かって必殺のライダーキックを放った。三体のジャガーロードの頭上に光の我が現れ、それと同時に大爆発を起こした。

そして、リト達は春菜達に旅の事を話し、別れを告げた。

リト

「春菜ちゃん、実はオレ「知ってるよ」えっ」

春菜

「結城君がララさんのことを好きだって。だからがんばってララさんを守ってね」

リト

「春菜ちゃん………。分かった!!」

こうしてリト達は友達に見送られ世界を後にした。……ってアレ!?

沙姫

「ちよつと作者!!どうして私の出番がないんですの!?!」
しらんよ。

唯

「あきらめてください。もう今回はこれで終わりですよ」

沙姫

「ええっ?私の出番これだけなんですの?作者……、出番増やして……!!!(涙)」

ムリッス

ED:Forever we can make it!(To

LOVER -とらぶる-OP)

第10話 アギTOLLOVEる(後書き)

私は春菜より、ララ派なのでこうしました。春菜派のみなさんすみません(謝)あとさっきも言ったとおり文才ゼロですががんばります!!応援してください!!

第11話 響鬼セイバース（前書き）

OP：輝

第11話 響鬼セイバース

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは

リト

「うわっ、何なんだよ！コイツら！」

シーン

「オレはシーン・ピアス。ライダーを探しているものだ」

リト

「ひょっとして・・・ライダーってオレ達のこと？」

シーン

「そうだ。君達二人はライダーフォースを浴び、ライダーの力を得た。共に大ショッカーの野望を防いでほしい」

ララ

「いいよ」

リト

「それじゃあ・・・いくぜ!!」

春菜

「結城君がララさんのことを好きだって。だからがんばってララさんを守ってね」

リト

「春菜ちゃん・・・。。。。分かった!!」

姫子

「これで残る世界はあと二つですね」
やちる

「うん。次は響鬼をスカウトするんだ」
そいうとやちるは用意されたおやつシュークリームを頬張る。
ツナ

「けどオレ達は数が多いから大丈夫だけどその世界って一人しかい

ないんだろ、ライダー」

美琴

「あたしも一人だけど何とかなったわよ」

ビリー

「心配はいらない。その少年は必ず仲間になってくれるよ」

ビリーの自信のあるセリフに皆は首をかしげる。

ヤミ

「どういうことですか？」

ビリー

「彼は何よりもケンカが好きだからさ」

ビリーがそう言うのと、そのモニターにはデジヴァイスicと猛士のマークが映っていた。

デジモンワールド

ルルーシュ

「飛影、歌、駆、奴は見つかったか？」

ルルーシュは響鬼の世界担当の飛影とオキタそしてその妹に通信をした。

オキタ

「いや、まだだ」

飛影

「人はいないが、デジモンはいるぞ」

飛影の言ったとおり、この世界はデジモンが生息する世界である。

ヒミコ

「ひ、飛影さん、う、後ろ!!」

飛影

「!!!」

飛影達の後ろには体が岩石でできたデジモン、ゴーレモンが現れた。オキタ

「クソッ、こんな時に」

その時、

大

「ちょっと待ったぁー！ー！ー」

突如一人の少年がゴーレモンを殴り飛ばした。

ヒミコ

「た、たった一人で……」

オキタ

「あのでかいのを……」

飛影

「間違いない……。奴が響鬼だ!!」

大

「響鬼？」

飛影達はゴーレモンを殴った少年、だもんまさる大門大にこれまでの事情を話した。

大

「ふーん。つまりあんた達はその大ショッカーと戦う組織ってやつ

か？」

ヒミコ

「う、うん」

オキタ

「そーなんだよ。悪いんだけどさーオレ達と一緒に来てほしいんだよ」

アグモン

「兄貴、どうする？」

大のパートナーデジモンアグモンが尋ねる。

大

「俺はいいぜ。なんてったって異世界の強いやつとケンカできんだからよ」

ビリーの言ってたことはこのことであつた。彼は学校では喧嘩番長

と呼ばれていて、200連勝もしていたのである。

飛影

「なるほどな……。まあいい、変身音又音角だ。大事に使えよ」

飛影は大に変身音又音角を渡した。

大

「それじゃあさっそく案内してくれよ」

飛影

「ああ。といたいたいところだが……」

飛影は何かに気づいた。するとオーロラが現れ、巨大な力二の魔化魍、バケガニが現れた。

大

「なんだ、あのデジモンは、見たことねえぞ！」

オキタ

「あれはデジモンじゃない！魔化魍だ！」

飛影

「行くぞ！」

大は音角を、飛影は変身鬼弦音枷、オキタは変身鬼弦音錠を、ヒミコは変身鬼笛音笛を使い、響鬼、斬鬼、轟鬼、天鬼に変身した。

アグモン

「かっこいいー」

響鬼

「そうか？」

響鬼は改めてバケガニをみる。

響鬼

「で、どうすりゃいい？」

斬鬼

「こいつらは音撃でしか倒せない。音撃は俺達の得意分野だからな。そういうと斬鬼は音撃斬列斬を取り出した。轟鬼も同じタイプの武器、列雷を出した。天鬼は音撃管烈風をそして響鬼は音撃棒 烈火を取り出した。

響鬼

「じゃあつ、行くぜ!!」

響鬼は烈火から火炎弾を放ち、バケガニにダメージを与える。

斬鬼

「いくぞ、駆!」

轟鬼

「はい!!」

轟鬼と斬鬼は腕に雷の力を集め、鬼闘術雷撃拳でバケガニを殴る。

天鬼

「お兄ちゃん、飛影さん!!」

天鬼は旋風刃でバケガニから二人を引き離す。

響鬼

「おし、止めだ!」

腰についてある音撃鼓火炎鼓をバケガニの背中につける。そして響鬼は音撃棒で左右交互に連続で叩き、清めの音をバケガニの体内に流し込んだ。響鬼の必殺技火炎連打の型である。そしてバケガニのは大爆発を起こした。

こうして大はマイティライダーズの一員として加わった。

大

「これから、俺は世界とケンカするけど、アグモン、お前も来るか!?」

アグモン

「ああ!!」

こうしてパートナーデジモン、アグモンも加わった。

刹那

「これで全員か……」

七諸

「いえ、まだディケイド、ディエンド、そしてアクセルが残っています」

ラブ

「今度は誰が行くの？」

ビッグコンボイ

「ディケイドは使用者によっては世界を破壊しかねない。クウガからキバ、そしてダブルに行ってもらおう」

リト

「オ、オレ達が!？」

あむ

「ありえないから――」

恭介

「俺はいくぜ」

姫子

「千歌音ちゃん、言ってくるね。大丈夫、みんながいるから」

千歌音

「姫子……。気をつけてね」

ネーナ

「刹那……」

翔太郎

「準備はいいな!」

全員

「おう!」

ハヤテ

「いつでもどうぞ!」

こうして十人の戦士は旅立った。九つの戦士の影と一枚のパクティオーカードに映るディケイドの絵がモニターに映っている。

おまけ

出撃前、姫子は千歌音を呼んだ。

千歌音

「姫子、何？話って」

姫子

「千歌音ちゃん……これをあげたくて……」

姫子は千歌音に小さな長方形の箱を渡した。

千歌音

「開けていい？」

姫子

「うん」

千歌音が箱を開けると、中にはアクセサリーが入っていた。

千歌音

「姫子、これって」

姫子

「私と千歌音ちゃんが出会った記念日だから……、何かプレゼントしようかと思って……」

千歌音

「姫子……ん／＼／＼／＼」

姫子

「ん／＼／＼」

姫子と千歌音はキスをした。この二人の愛が永遠に続くことを祈って……。

第11話 響鬼セイバース（後書き）

よ、よかった……。姫千歌記念間に合って……。。

ED：強 ing！ Going！ My soul！！（デジモン
セイバースOP）

ディケイド!? もう一人の十号ライダーって誰ですか? byネギ(前書き)

OP: Anything Gose!

ディケイド！？ もう一人の十号ライダーって誰ですか？byネギ

前回の仮面ライダーSPIRITS NEOは
ルルーシュ

「飛影、オキタ、ヒミコ、奴は見つかったか？」

大

「ちょっと待ったぁー！ー！ー」

大

「俺はいいぜ。なんてったって異世界の強いやつとケンカできんだからよ」

大

「これから、俺は世界とケンカするけど、アグモン、お前も来るか！？」

アグモン

「ああ！ー！」

ビッグコンボイ

「ディケイドは使用者によっては世界を破壊しかねない。クウガからキバ、そしてダブルに行ってもらおう」

京介

「準備はいいな！」

全員

「おう！ー！」

麻帆良学園都市、そこに一人の少女が搜索をしていた。彼女の名は鴉羽舞衣。マイティライダーズの一員で刹那達より先にこの世界に來ていたのだ。

舞衣

「まいったな！ー！。ここどこだろ」

舞衣はこのとおり、道に迷っていた。とそこに、

舞衣

「ん？」

一人の男性が寝そべっていた。

舞衣

「ちょっとその人、そんなとこで寝てるとカゼ引きますよ」

？

「う、うう……」

男は立ち上がり、舞衣の方を向いた。

舞衣

「大丈夫ですか？」

？

「あ、ああ……」

舞衣

「あなた、名前は？」

？

「俺の名か……俺は自分の名前以外は何も覚えていない……」

「

どうやら彼は記憶喪失にあっているらしい。

舞衣

「はい……！？そ、それじゃ……名前は？」

？

「俺か、俺の名は……」

一方そのころ、マイティライダーズは……

ツナ

「この学校、意外と広いな……」

大

「とにかく大ショッカーの奴等がどこかにいるはずだ。手分けしよ
うぜ」

ラブ

「うん」

こうして、二組に分かれた。

A班

美琴

リト

刹那

大

あむ

B班

姫子

ラブ

ツナ

ハヤテ

京介

京介

「よいいくぞ!!」

こうして二班に分かれたライダー達は学園中を探し回った。

A班

大

「くっそー、ここも手がかりゼロかよ」

リト

「ん？なんだありゃ」

刹那

「どうした、リト」

リトが目にした看板には、『チュパカブラ研究会』の文字が書かれ

ていた。

あむ

「なにこれ？」

美琴

「ねえ、あそこで何か聞いてみない？」

大

「そうだな」

こうして彼らはチュパカラ研究会に入ってしまった。

B班

ハヤテ

「ここももぬけの殻ですね」

姫子

「それじゃ、次のところへ・・・」

姫子は一人の少年を見て絶句した。その少年、犬神小太郎には犬の耳が生えているからだ。

小太郎

「なんや？姉ちゃん達。あんまジロジロ見んといてや」

ハヤテ

「あ、すいません」

京介

「ん？」

京介はトランクケースの一つが震えるのを見た。

京介

「もしかして・・・、コイツかあ!？」

小太郎

「ん？なんや？」

そして、麻帆良学園のとある教室。

ネギ

「ではここを亜子さん」

ネギはあの時以来の後遺症も無く普通に授業を行っていた。それは明日菜も同じであった。

カモ

「しかし、こうした平和もめつたに味わえないしなー」

モツ

「そうですね。いい意味で」

シチミ

「だミヤアー」

大

「情報ゼロかよ・・・」

A班のメンバーはチュパ研ことチュパブラ研究会の部室に入って行ったがもぬけの殻だったため、に校内をうろついていた。
あむ

「とりあえず、B班に合流する？」

リト

「そうだな」

とそこに、彼らのまえに灰色のオーロラが現れた。

刹那

「大ショッカーか!!」

そこからはショッカー戦闘員とマスカレイド・ドーパンドが現れ、刹那達に襲いかかった。

美琴

「あたしにまかせて!!」

そういうと、美琴はコインを弾き、高電流を放った。これが彼女の能力、超電磁砲である。レールガンは戦闘員を飲みこみ、吹き飛ばした。

ドゴーーン

リト

「スゲエ……」

とそこに、

舞衣

「おーい」

舞衣とさきほどの男性が刹那達の元へやってきた。

リト

「あんたが鴉羽舞衣か」

舞衣

「ええ」

あむ

「それで、その人は？」

舞衣

「ああ、この人は」

すると男性は自分の名を名乗った。

良

「俺は村雨良だ……」

そのころB班は、ネギ達に遭遇した。

ネギ

「ええつ、僕が仮面ライダー？」

明日菜

「どーいうことよ？」

このか

「ひょつとして、このあいだの流れ星なん？」

京介

「そうだ」

小太郎

「なんや？そのライダーフォースちゅーんは」

京介は今回の目的を話した。そして、小太郎にもアクセルの力が備わっていることを教えた。

小太郎

「なんや知らんけど力貸すで！！」

京介

「決まりだな」

とそこに京介のスタッグフォンが鳴った。相手は桐乃だ。

京介

「どうした、桐乃」

桐乃

「兄貴。じつはさっきバースの適合者を見つけたんだ」

京介

「そうか。で、誰だ？」

桐乃

「黒子だよ」

京介

「何！？よりもよってあの変態が！？」

しつての通り、黒子は自他共に認める変態なのだ。美琴の下着をかぶったり、一緒にホテルに行こうとしたり、媚薬を飲ませようとしたりなど、数えればきりのないことをしでかしているのだ。

京介

「まあいい。そして、明日菜と言ったな。お前はディエンドだ」

明日菜

「ディエンド？」

ネギ

「それで、僕は？」

京介

「お前は・・・仮面ライダーディケイドだ」

ネギ

「ディケイド・・・」

とその時A組の生徒が現れた。

エヴァンジェリン

「ぼーや、大変なことが起こった」

翔太郎

「誰だお前！？」

エヴァンジェリン

「そのセリフそのままバットで打ち返すぞ」

ネギ

「それで、大変なことって！？」

このか

「怪物が現れたんや！」

ラブ

「まさか！！」

京介

「ようやくお出ましか！大シヨッカー！！」

京介達はすぐさま現場に向かった。

ディケイド！？ もう一人の十号ライダーって誰ですか？byネギ（後書き）

ED：1000% SPEARKING！！（ネギま！？OP）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8429j/>

仮面ライダーSPIRITS NEO

2011年11月13日06時44分発行